

旗 原 遺 跡

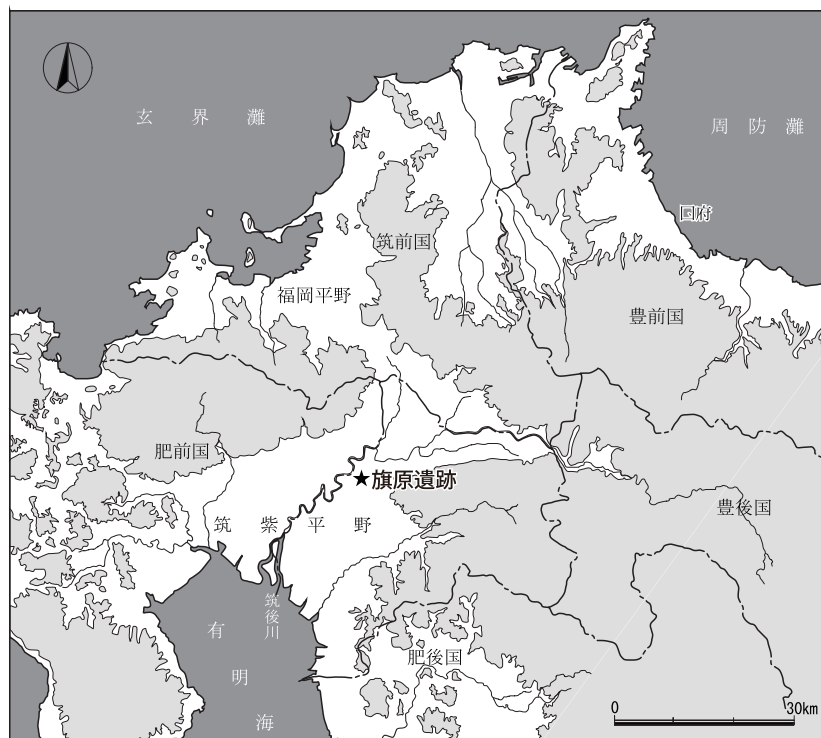
— 第 3 次 調 査 —

平成24年（2012）3月

久留米市教育委員会

旗原遺跡

-第3次調査-



序

筑紫平野の中心に位置する久留米市は、九州最大の河川である筑後川と、耳納連山の山並みに代表される豊かな水と緑に囲まれています。この恵まれた環境のもと、先人達は多くの文化を創造し、市内各地には貴重な文化財が数多く存在しています。

ここに報告する旗原遺跡は、老人ホーム建設工事に先立って、平成22・23年度にかけて発掘調査と整理作業を実施しました。その結果、弥生時代の墓や古墳時代の竪穴住居跡、中世の墳墓群を発見いたしました。弥生時代早期の墓は、広川流域におけるもっとも早い段階での弥生文化の伝来をうかがわせるものですし、古墳時代中期の竪穴住居には、朝鮮半島起源のカマドが造り付けられるなど、当時としては最新の住居構造をいち早く取り入れたものでした。恐らく、広川～筑後川～有明海という水上の道を通じて、朝鮮半島などの東アジア地域と活発な地域間交流が行われていたことでしょう。

本報告書の刊行が、このような古代久留米の歴史を解明する一つの契機となり、かつ文化財保護の理解と普及の一助となりますならば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の刊行に際しまして、多大なご理解とご協力をいただきました医療法人禅思会理事長鈴木陽夫氏をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正則

例 言

1. 本書は、平成22・23年度に医療法人禅思会理事長鈴木陽夫氏（南陵病院院長）の委託を受けて実施した、老人ホーム建設工事にともなう旗原遺跡第3次調査の発掘調査を記録した報告書である。
2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の小澤太郎が担当した。なお、遺跡略記号と調査番号は以下の通りである。

遺跡名（調査回数）	担当者	略記号	調査番号
旗原遺跡（第3次）	小澤	HTB	201019

3. 遺構の測量については、トータルステーションで三次元計測し、小澤と森 啓恵・塚本明美がこの作業にあたった。遺物出土状況や土層図などの個別の実測図については、水系メッシュ法で小澤が作成し、スキャナーで画像データ化後、CUBIC社製ソフト「遺構くんCUBIC」でトレースした。トータルステーションで取得したデータやトレースした遺構図のデータは、小澤が「遺構くんCUBIC」上で編集・統合した後、epsデータとして出力し、さらにillustratorデータ形式に再変換したものを同ソフトで最終的に編集し、印刷工程を経て本書に掲載している。
また、遺物実測は小澤（図24・25-1～42）、文化財保護課の林知恵（図26・27-43～56）と江島伸彦（図27-57）が行った。なお、すべての遺物のデジタルトレースは、小澤が行った。
4. 掲載した写真については、空中写真が（有）空中写真企画、遺構と遺物写真は小澤が撮影した。
5. 遺構測量は、平面直角座標系を基に作成し、その際、日本測地系2000を用いた。従って、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構表記は、下記のとおりである。
SD…溝、SE…井戸、SI…竪穴住居、SK…土坑、SP…ピット、ST…墳墓、SX…その他
7. 図24～27、図版22～28に掲載した番号は、「本書における遺物番号＋（本市遺物登録番号）」である。
8. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。
9. 本書の執筆・編集は小澤が担当した。

本文目次

I. 経緯	1
I-1) 調査に至る経過	1
I-2) 調査の体制	2
II. 位置と環境	3
III. 発掘調査の記録	7
III-1) 調査の経過	7
III-2) 基本層序	8
III-3) 検出遺構	9
III-4) 出土遺物	38
IV. 総括	45

插图目次

図1 旗原遺跡の位置（1/200,000）と周辺の遺跡分布（1/25,000）	5
図2 調査地点の位置と周辺地形（1/2,500）	6
図3 調査区平面図（1/200）	折り込み
図4 S I 10平面・断面見通し・土層図（1/60）	10
図5 S I 20平面・土層図（1/60）、カマド残欠土層図（1/30）	11
図6 S I 50・60平面・断面見通し図（1/60）	13
図7 S I 100・110・740平面・断面図（1/60）、S I 100屋内土坑遺物出土状況（1/30）	14
図8 S I 190・200・400平面・断面図（1/60）	15
図9 S I 190カマド平面・断面見通し・土層図（1/20）	16
図10 S I 500・550平面・断面見通し図（1/60）	18
図11 S K 30・120・230・240・510・760平面・断面見通し・土層図（1/40）	20
図12 S D 40・70、S X 800、S E 300断面・土層図（1/20・1/40）	21
図13 S T 220平面・断面図（1/20）	22
図14 S T 80・130・140・150・350平面・断面見通し図（1/20）	23
図15 S T 160・170・650平面・断面見通し・土層図（1/20）	25
図16 S T 180・210・340・360平面・断面見通し・土層図（1/20）	26
図17 S T 310・320・390・410・450平面・断面見通し図（1/20）	28
図18 S T 370・470・560平面・断面見通し・土層図（1/20）	29
図19 S T 420・440・460・520平面・断面見通し図（1/20）	31
図20 S T 430・490・690平面・断面見通し図（1/20）	32
図21 S T 570・580・590・670平面・断面見通し図（1/20）	33
図22 S T 630・640・700・720・730平面・断面見通し図（1/20）	35
図23 S T 680平面・断面図（1/60）	37

図24	S I 10・20・50・60・90・100・190、S D40出土遺物実測図（1/1・1/4）	39
図25	S I 400・500出土遺物実測図（1/2・1/4）	41
図26	S T 220出土遺物実測図（1/4）	43
図27	S T 80・410・440・450・520・560・590・630出土遺物実測図（1/1・1/2・1/4）	44
図28	主要遺構の変遷（1/500）	46

写真図版目次

図版 1	(1) 調査地全景（北上空から） (2) 調査区西半部全景（東から）	図版13	(1) S T 220全景（北から） (2) S T 80全景（南東から） (3) S T 130全景（北西から）
図版 2	(1) 調査区から北西方向を望む（西から） (2) 調査区東半部全景（北から）	図版14	(1) S T 140全景（北西から） (2) S T 150全景（北西から） (3) S T 160土層（南西から）
図版 3	(1) S I 10炭化物検出状況（北東から） (2) S I 10遺物出土状況（南東から） (3) S I 10完掘状況（北東から）	図版15	(1) S T 160桶痕跡検出状況（南東から） (2) S T 170土層（南西から） (3) S T 180土層（南東から）
図版 4	(1) S I 20新段階全景（北東から） (2) S I 20壁溝検出状況（南東から） (3) S I 20カマド残欠検出状況（南東から）	図版16	(1) S T 210全景（西から） (2) S T 340土層（南西から） (3) S T 370土層（南西から）
図版 5	(1) S I 20屋内土坑土層（北東から） (2) S I 20古段階完掘状況（南東から） (3) S I 50全景（北東から）	図版17	(1) S T 370全景（南東から） (2) S T 410全景（南東から） (3) S T 420全景（南東から）
図版 6	(1) S I 60全景（南東から） (2) S I 60東壁際遺物出土状況（南東から） (3) S I 60北西隅部壁溝・ピット配置状況（南東から）	図版18	(1) S T 430全景（南東から） (2) S T 440全景（南東から） (3) S T 470全景（南東から）
図版 7	(1) S I 90全景（南東から） (2) S I 100全景（南東から） (3) S I 110全景（南東から）	図版19	(1) S T 490全景（北西から） (2) S T 520全景（東から） (3) S T 560全景（東から）
図版 8	(1) S I 190全景（南東から） (2) S I 190カマド検出状況（北東から） (3) S I 190カマド土層（北東から）	図版20	(1) S T 570全景（北東から） (2) S T 580全景（東から） (3) S T 590全景（南西から）
図版 9	(1) S I 200全景（西から） (2) S I 400遺物出土状況（北東から） (3) S I 500全景（北西から）	図版21	(1) S T 630全景（南東から） (2) S T 630五輪塔出土状況（東から） (3) ST680全景（北東から）
図版10	(1) S I 550全景（南東から） (2) S K30遺物出土状況（北西から） (3) S K30土層（南西から）	図版22	出土遺物写真（1）
図版11	(1) S K230全景（西から） (2) S K240全景（西から） (3) S K510全景（北東から）	図版23	出土遺物写真（2）
図版12	(1) S E300土層（北東から） (2) S D40・70土層（南西から） (3) S D70北端部完掘状況（南東から）	図版24	出土遺物写真（3）
		図版25	出土遺物写真（4）
		図版26	出土遺物写真（5）
		図版27	出土遺物写真（6）
		図版28	出土遺物写真（7）

I. 経 緯

I-1) 調査に至る経過

平成21年10月14・15の両日、医療法人禅思会理事長鈴木陽夫氏より、久留米市荒木町下荒木1540-2、1541-1、1556-1、1557-1、1558における老人ホーム建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の有無の照会が提出された。南西隣接地では、平成12年度に同法人による病院関連施設建設に先立ち、旗原遺跡第2次調査が実施されている。その事前の試掘調査の際、当該地においても計5本の南北トレンチが設定され、耕作土+床土直下の地山面で、古墳時代のものと考えられる堅穴住居跡や溝、土坑、ピットなどが検出されていた。ただし、過去に削平を受けており、病院本体部分よりも遺構密度は低いと判断された。その後、当該地には病院関連施設の一部としてテニスコートが建設されたが、その際は盛り土によって遺跡に影響を与えないために、現状保存措置をとった^{註)}。

今回の計画では、このテニスコートを取り壊し、跡地に地下室を有する建物を建設することから、建物部分については発掘調査が必要であるとの回答を行った。協議が進行する中で、遺跡の取り扱いについては、発掘調査を実施することで地権者側の了承を得ることができた。しかし、時期的に契約締結は年度末となり、調査予定面積が約2,300㎡に上ることから、調査は2カ年に及ぶことは避けられない状況であった。

一方で、テニスコート造成時に約40cm盛土された真砂土を中心とする客土層の存在も問題となった。しかし、この層については、地権者側がテニスコートの解体時に約10cmの厚さを残して除去することになった。しかしそれでも、客土除去後の面から遺構面までの深さを約30cmと想定すれば、調査予定範囲内の排土量は600㎡を優に超える。対象面積は5,692㎡と広いが、調査予定地外はアスファルト張りの駐車場などが大半を占めており、敷地内に排土を積み上げることは困難であると考えられた。この点からも、調査区を東西に分割して調査せざるを得なかった。

以上の点から、年度ごとに調査予定地を半分ずつ分割して、2カ年にわたって発掘調査を実施することとなった。順序としては地権者側の要望で、まず西側半分から調査することにした。これは、早ければゴールデンウィーク明けにでも、部分的に工事を開始する予定があったためである（実際には、工事は調査終了後に行われた）。このような経過を踏まえて、調査範囲、調査面積、調査期間、調査費用とその負担、スケジュールなどの点で両者合意に達した。

平成23年2月2日付で医療法人禅思会理事長鈴木陽夫氏と久留米市長檜原利則とが「旗原遺跡第3次調査における埋蔵文化財に関する基本協定」（以下、基本協定と略称する）を取り交わした。また、同日付で委託契約を締結している。文化財保護法による諸手続を済ませた後、2月8日より現地調査に着手し、3月30日契約変更、同年4月7日付で基本協定に基づき新年度分の現地調査と整理報告についての契約書を取り交わし、7月8日に現地調査を終了した。

註) この経緯については、久留米市教育委員会編 2001『旗原遺跡―第2次調査―』をご参照いただきたい。

I-2) 調査の体制

発掘調査年度である平成22年度と、発掘調査および報告書作成年度である平成22・23年度における調査と整理の体制は以下の通りである。

〔発掘調査：平成22年度〕

調査委託：医療法人禅思会	理事長 鈴田陽夫
調査主体：久留米市教育委員会	教育長 堤 正則
調査総括：久留米市文化観光部	部 長 辻 文孝
文化財保護課	課 長 立石雅文
	学芸主幹 山口 淳
	課長補佐兼主査 宮崎俊一・古賀正美
	主 査 白木 守
	事務主査 近澤康治（調査総括・事前確認）
	庶務担当 本庄ともえ
	調査担当 小澤太郎

発掘調査臨時職員：勝田美代子・蒲池 稔・塚本明美・津留崎利子・原口貞子・森 啓恵・秋吉 力・
合戸喬一・緒方具美・細江シズ子

〔発掘調査報告書作成：平成23年度〕

調査委託：医療法人禅思会	理事長 鈴田陽夫
調査主体：久留米市教育委員会	教育長 堤 正則
調査総括：久留米市市民文化部	部 長 辻 文孝
文化財保護課	課 長 立石雅文
	課長補佐兼主査 宮崎俊一・古賀正美・園井正隆
	主 査 白木 守
	事務主査 近澤康治（調査総括・事前確認）
	庶務担当 豊福早苗
	調査担当 小澤太郎

整理担当専任非常勤 古賀和子・岩本枝美（4～6月）

発掘調査臨時職員：秋永絹子・大淵文子・勝田美代子・蒲池 稔・川原初美・田中とし子・塚本明美・
津留崎利子・中野ゆみ・原口貞子・森 啓恵・溝口輝男・古賀勝治・秋吉 力・
合戸喬一・緒方具美・細江シズ子

出土品整理臨時職員：松本祥子・半田一衣・田中千佐子・野口晴香

なお、医療法人禅思会の理事長鈴田陽夫氏、信行商会の古賀末廣氏には、各種手続きや調査の進行について多大なご配慮とご協力をいただいた。地元在住の川島敏郎氏からは、荒木校区の歴史に関する様々なご教示を得た。また、田中正日子（久留米市文化財専門委員長）・松村一良（広島大学大学院）の各先生からも現地でご指導とご助言をいただいた。以上、記して感謝申し上げたい。

II. 位置と環境

本遺跡は、筑後川南岸に聳える耳納山地先端部より西に派生した、広川下流左岸の標高約9mの低台地上に位置する。北方約400mには筑後川の支流である広川が西に流れ、その氾濫原と低台地との比高差は約3mである。広川は、西方約3.5kmで筑後川と合流、やがて有明海へと注ぐ。

近代以前の筑後川や広川は、当地方における重要な水上交通路であった。これは、最大6mにも及ぶ有明海の激しい干満の差を利用したものである。大潮の日、満潮ともなると河川の淡水が海水に押し上げられ川上へ逆流し（あお）、これに乗れば上流へ容易く航行できた。古墳時代の広川下流域は水沼君の本拠地であるが、同河川を遡れば、筑紫君の奥津城である八女丘陵北側に至ることが可能である。一方、干潮ともなれば、広川から筑後川へ一気に下り、速い潮流に乗って有明海を抜け外海へと繰り出すことができる。このように、環有明海地域は古代における対外交流の重要な門戸であり、当地方もその拠点のひとつであったことが想像される。

弥生時代 広川下流域では、古賀遺跡や宮原遺跡などで、弥生時代早期にまで遡る可能性のある遺構や、突帯文土器片が出土している。前期末～中期初頭になると道蔵遺跡で集落形成が、古賀遺跡や汐入遺跡で墓地の形成が開始され、中期を通じ後期初頭まで継続する。後期～終末期になると、道蔵遺跡の集落は俄然整備が進み、直径約160mの生活空間を二重の環濠によって人工的に取り囲む。この時期の出土遺物として注目されるのが、韓式土器（軟質土器）や、筑後川流域の集落から多く出土する透かしのある器台などである。墓地では、本遺跡と同じ低台地上に立地する一・の左右遺跡の土壙墓から大量のガラス小玉を出土したのをはじめ、道蔵遺跡・古賀遺跡などでも土壙墓や甕棺墓が展開する。また、道蔵遺跡では、中期初頭以降、銅鏃や青銅製鉈、鉄製の鎌・方形刃先などの金属器が見られ、甕棺墓から広形銅戈が出土する。この他、筑後川との合流地点である三潴町から八女市、八女郡広川町にかけての広川兩岸には、青銅器を埋納する遺跡が7ヶ所あり、これらは約2～3km間隔で分布している。

古墳時代 広川下流域の右岸には、『日本書紀』に景行天皇条や雄略天皇条に登場する水沼（間）君の奥津城と考えられる、5世紀後半～6世紀初頭の国指定史跡「御塚・権現塚古墳」や銚子塚古墳（消滅）などの大形首長墓が築造された。御塚古墳は三重の周濠をめぐらす墳長78mの帆立貝型の古墳、権現塚古墳は北側に隣接する径50mの大形円墳で、二重の周濠を有する。銚子塚古墳は二重周濠を有する前方後円墳とされるが、戦前に開墾され実態は不明である。このうち御塚・権現塚古墳からは、新羅土器が出土している。その後は、首長墓は広川上流側へ移り、6世紀後半には二子塚古墳・鷺塚古墳が築造される。一方、広川下流左岸域では、八女古墳群の最西端の前方後円墳と言われる十蓮寺古墳があり、5世紀前半の年代が与えられている。

集落についても、近年の調査で生活諸施設が発見されつつある。対岸の道蔵遺跡では前期の竪穴住居・井戸、御供田遺跡や蓮輪遺跡からは後期の土坑、天神免遺跡からは後期の井戸などを検出しており、広範囲に集落域が広がっていた可能性が考えられる。また、二子塚古墳周辺の二子塚遺跡

や白口経塚遺跡では後期の竪穴住居・土坑などが検出されており、同古墳造営との関連が考えられる。一方、広川下流左岸域でも、一の左右遺跡や荒木今宮脇遺跡、本遺跡第2次調査地から竪穴住居が検出されている。荒木今宮脇遺跡で検出された竪穴住居内部にはカマドが造り付けられており、5世紀前半～中葉の年代が与えられている。この遺跡は、本遺跡の東方約1.3kmの同一台地上に位置するなど地理的に近く、関連が注目される。

飛鳥～平安時代 律令期の付近一帯は筑後国三潞郡として『和名抄』に記載され、郡内には高家・田家・三潞・鳥飼・夜開・青木・荒木・管綜の8郷の名が見える。うち、荒木町一帯が「荒木郷」、梅満町鳥養一帯が「鳥養郷」、三潞町高三潞一帯が「三潞郷」、大川市青木一帯が「青木郷」に属していたと考えられている。

これらの郷を統括し、徴税業務等の行政を司ったのが郡衙である。対岸の道蔵遺跡では、8世紀後半～9世紀代にかけての計画的に配置された大形掘立柱建物群が検出されている。出土遺物にも転用硯や緑釉陶器、越州窯系青磁、錫杖鋳型などの特殊な遺物や、郡名とされる「三万」や官職名と考えられる「大領」「三万少」「三万領」「帳」といった墨書土器が出土している。一方、古賀遺跡では、昭和20～30年代の市営住宅造成時に炭化米が出土したと伝えられる。付近一帯には、古賀軍司（郡司か）長者の伝承が残り、かつ近年の調査でも奈良時代前半の区画溝と考えられる遺構を検出しており、郡衙正倉の候補地とされる。

道蔵遺跡と古賀遺跡の中間地点には、大善寺玉垂宮が存在する。大善寺は、高良玉垂命・八幡大神・住吉大神を祭神とする玉垂宮の神宮寺であり、あわせて御船山大善寺玉垂宮と称した。大善寺勾当職の吉山清満が、慶長9年にまとめた家譜「吉山旧記」によると、その起源は白鳳元(672)年、法相宗の僧安泰が建立した御船山高法寺に始まるという。そして、延暦14(795)年には天台宗に改宗している。弘仁5(814)年、筑後国三池郡司師直の命により僧房四十五坊・社領三千町となった。その際、堂社に善を尽し華美を尽したので、大善寺と改称したと伝える。事実、境内やその周辺から出土した古瓦には、竹状模骨痕のある無段式の丸瓦や老司式軒平瓦など、飛鳥～奈良時代前半に遡るものが見られる。これら大善寺遺跡出土の竹状模骨痕のある丸瓦や正格子文叩き目の平瓦については、広川南岸丘陵上にある八女市の牛焼谷窯跡で焼成されたものと特徴が一致し、十数km離れた同窯跡から郡を超えて供給されていたことが判明している。また、同窯跡の製品は近年、広川町正恵大坪遺跡や古賀遺跡など、広川流域の他遺跡からも確認されている。

郡司クラスの居宅の例として、天神免遺跡がある。ここでは、5間×2間の身舎の四面に廂が取り付く掘立柱建物と、5間×2間の掘立柱建物がL字形に配置された状況が見られる。その他にも、L字形に並ぶ建物群や、四面廂建物・井戸などが存在し、3時期以上の変遷が考えられる。出土遺物に、緑釉陶器・越州窯系青磁等も見られることや、建物の規模・建物配置・敷地規模・倉庫群を伴わないことなどの理由から、8～10世紀頃の有力者の居宅である可能性が考えられる。

代表的な集落としては、広川下流域北岸の御供田遺跡がある。ここでは、7世紀末～9世紀前半頃にかけての集落が発見されている。この集落は、3間×2間の側柱建物と総柱建物がセットにな

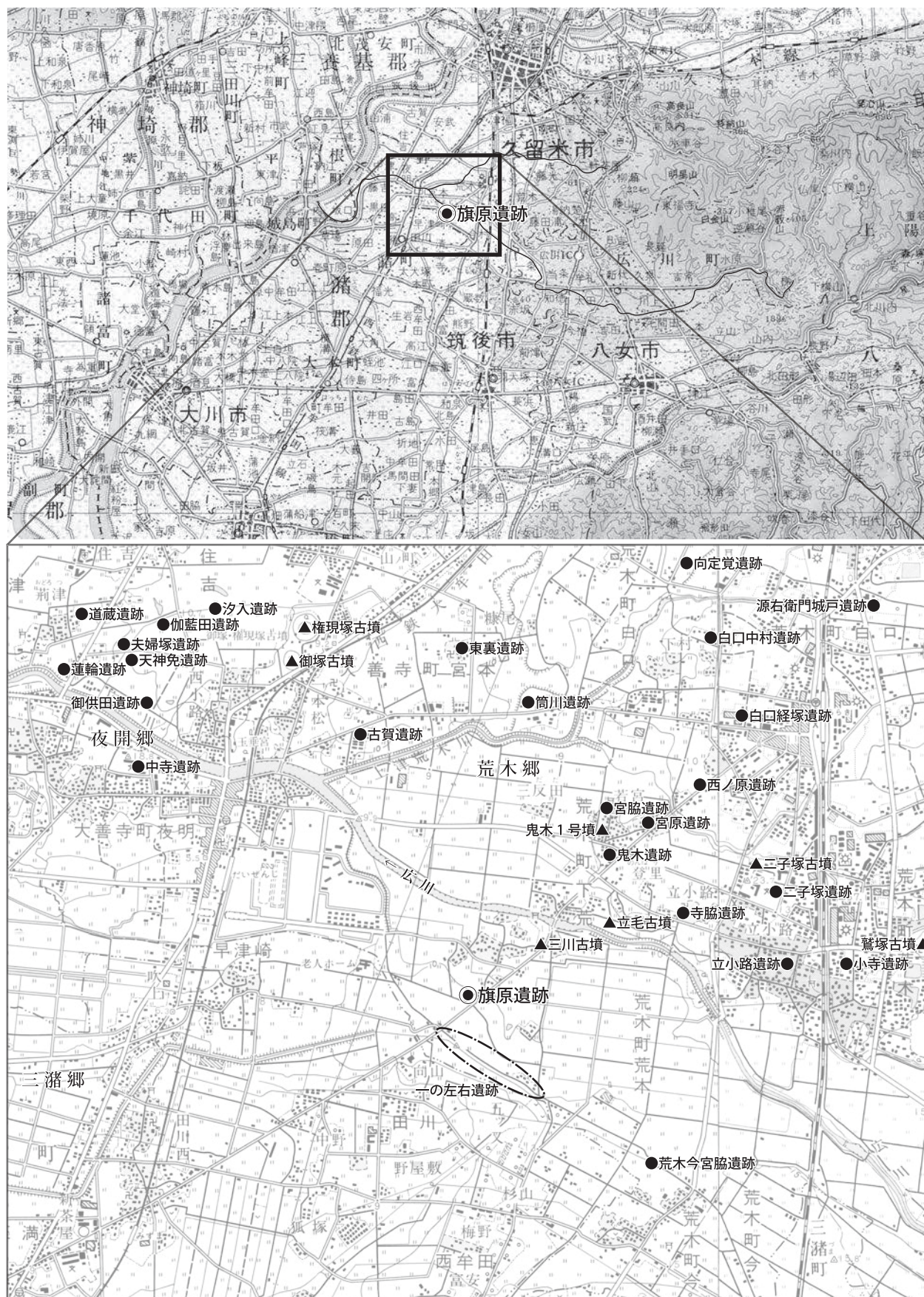


図1 旗原遺跡の位置 (1/200, 000) と周辺の遺跡分布 (1/25, 000)

っており、井戸や廃棄土坑を伴う。特徴的なのは、竪穴住居が一切存在しないことである。また井戸や溝から獣骨が頻繁に出土することがある。更に、井戸内から斎串も検出しており、当時の集落での精神生活の一端が伺われる資料である。このように、飛鳥時代末頃より掘立柱建物で構成される同様の集落は、浅い谷を挟んで北側に広がる伽藍田遺跡・夫婦塚遺跡や、対岸に立地する本遺跡第1次調査地など、三潞郡内では広範囲に存在する。

鎌倉～室町時代 鎌倉時代になると、御家人である荒木近藤氏が台頭する。荒木氏は元の姓を藤原といい、文永の役に功があつて近江国から荒木に移住したという。そこで荒木家を継ぎ、近江からきた藤原氏ということから、近藤とも称するようになったと言われている。広川北岸の立小路遺跡からは、多量の貿易陶磁器が出土しているが、同地は幕末に矢野一貞が記した『筑後将士軍談』では、近藤備後守の居館跡とされている。その東方約300mの小寺遺跡では、10棟以上の掘立柱建物とともに、両側溝を有する幅約6mの道路遺構が検出された。ここでも貿易陶磁や中国銭貨類が出土し、付近一帯での経済流通活動が非常に盛んであったことを示している。荒木近藤氏はその後も荒木付近一帯に所領を有していたようで、天正6年（1578）の「筑後領主附」にも、「荒木居荒木村領十三町」とある。近世には、上荒木村や住吉村の庄屋を勤める者もあり、館跡周辺には現在もなお、近藤姓が多い。

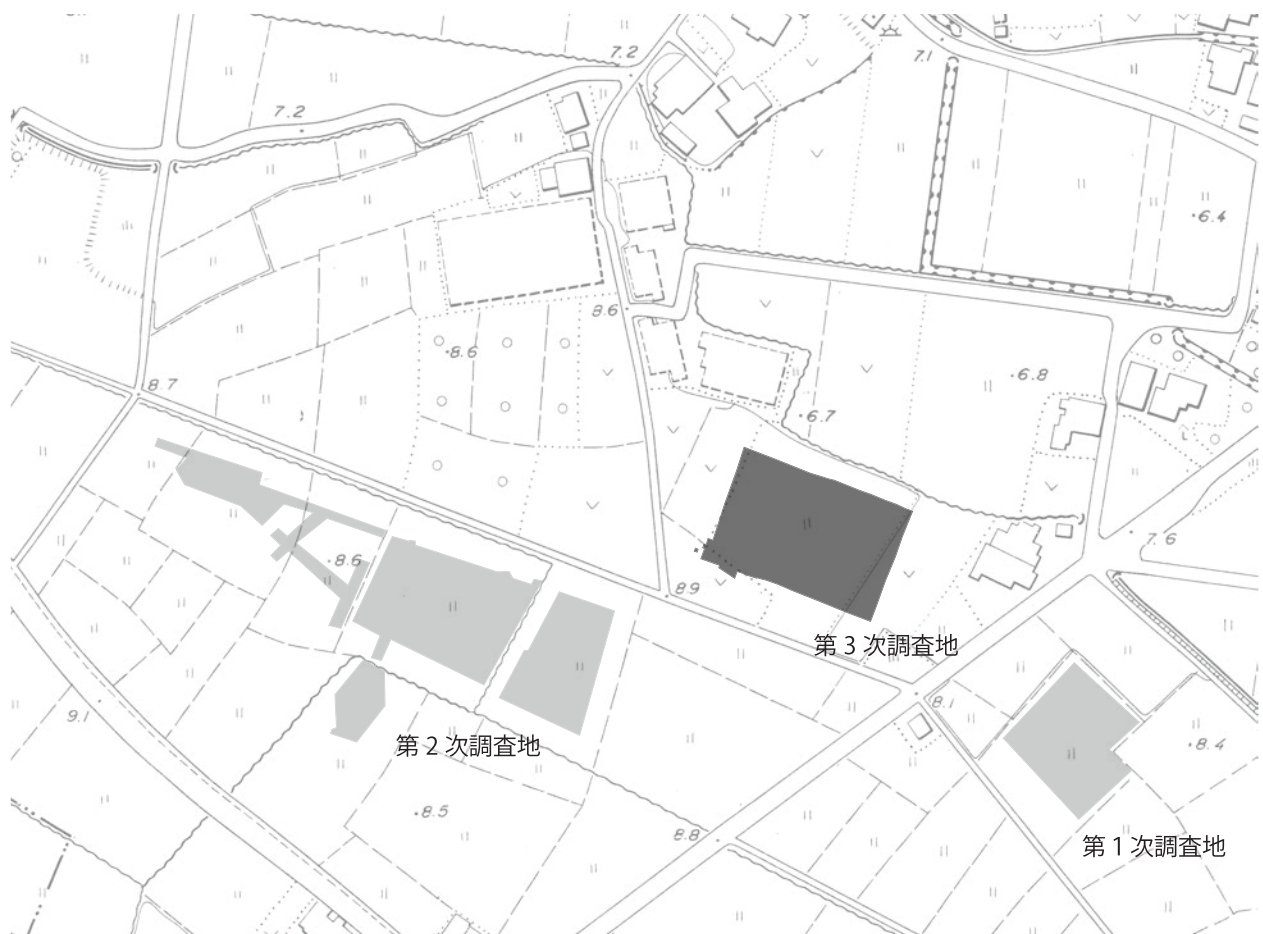


図2 調査地点の位置と周辺地形（1/2,500）

Ⅲ. 発掘調査の記録

Ⅲ－１) 調査の経過

この発掘調査は老人ホームの建設に伴うものである。道路を挟んで対象地東側では第１次調査、同じく南西隣接地では第２次調査が実施されており、いずれも良好な状態で遺構が検出されている。第１次調査では７世紀後半～８世紀前半の掘立柱建物が多数検出された。第２次調査では、６世紀後半～８世紀半ばの竪穴住居や掘立柱建物、溝、土坑などが発見され、古墳時代後期～奈良時代前半にかけての集落跡であることが判明していた。

今回の調査地は、位置的に第１次調査地と第２次調査地の中間にあたり、関連遺構と遺物の検出を調査の目的とした。調査は、前章で述べた理由から東西に二分割して行った。

西半分の調査は、平成23年２月８日に開始し、３月26日～４月11日の中断期間を経た後、年度を跨いだ５月24日に終了した。引き続き翌25日より東半分の調査を開始し、７月８日に現地調査は全て終了した。

なお、調査期間中の６月９日、対象地北東隅のホール予定地について試掘調査を行ったが、遺構がないため慎重工事とし（21文財第1－327号）、今回の調査対象からは外している。

以下、日誌より調査の経過と概略を記す。

平成23年２月８日、対象地内に東西60m、南北40mの調査区を設定する。うち22年度は西半部を開け、東半部を排土置き場とする。北西側はピットが散在する程度で密度が低い。しかし南端部と北端部付近で竪穴住居を確認。南西端部、南端部にかかる住居跡は部分的に拡張し、規模の推定を可能にするため、コーナー２ヶ所を確認することにする。９日、作業員を投入し、テント設営。昨夜の降雨のため排水作業、その後壁切り作業、土嚢作成作業し、北西角より遺構検出作業を開始する。21日、田中正日子先生来訪。調査区東辺部には、不定形の茶褐色土の広がりが見られる。よく観察すると、コーナーや直線部分も見られることから、床面付近まで削平された竪穴住居の可能性があるだろう。22日、昨日検出した掘立柱建物柱穴と類似した掘方を複数検出する。覆土は人為的埋土で、大振りの各種ブロック土が混入する。しかし、明確に並ぶものがなく、建物柱穴以外の可能性も考える必要ありか。24日、竪穴住居SI10を掘り下げる。

３月２日、S I 10床面直上からは炭化材や焼土が出土した。４日S I 20の掘り下げを開始。９日、S I 20は新旧２時期が重なっていることが判明した。10日S D 40・S I 50を掘り下げ。11日S I 60を掘り下げ。15日、三潅町内から座標移動する。18日、S K 30の土層図（1/10）を作成、S D 70を掘り下げる。長方形プランの土坑S K 80を半裁し掘り下げる。当初、近現代のカクランである可能性を考えたが、北西隅から土師器の坏が顔を出したため土壇墓と判断し、S T 80と改める。S I 20の土層図（1/20）を作成する。翌日、S T 80の遺物出土状況を実測（1/20）。25日、簡易水洗トイレ汲み取り後撤収、今年度の調査を終了する。

４月12日、新年度の調査を開始する。調査区東部の土坑群を掘り下げ、ブロック土で埋め戻し

れている。S T 80と同様の土壇墓と思われる。S I 90も掘り下げるが、一段下げで床面に到達。14日、調査区北東隅の段落ちを掘り下げ。平行に何本もの細い南北溝が狭い間隔で走行。北側へ向けて地形的に傾斜する部分。畑の畝状のものか。S T 170半裁後の土層図完成（1/10）。S D 40・70土層図作成（1/20）。18日、本日より作業員を増員。S I 190・200を掘り下げ。20日、S I 190にカマドと煙道を確認。26日、S I 100・110掘り下げ。南側のS I 100が切る。

5月2日、S X 220から全面ミガキ仕上げの丹塗りの壺棺が出土。9日、S T 220（遺構略記号をS X 220から変更）を個別実測（1/10）、S K 230・240完掘。13日、調査区内の清掃開始する。17日、風が強い中、気球写真撮影。23日、調査区西半部の埋め戻しを開始する。夕方より雨脚が強くなり作業中止。24日、ポンプで排水作業を行いながら、重機による埋め戻しと東半部の表土掘削作業を続ける。25日、調査区東半部の壁切り作業、遺構検出作業を開始する。31日、重機は排土の積み上げ作業を行う。遺構検出作業を続けながら、S E 300を掘り下げる。

6月1日、地元の世話役・川島敏郎氏ほか住民3名と荒木中学校1年生女子生徒4名現場来訪。3日、S E 300の土層図（1/20）作成。6日、当調査区でも中世墓が多く分布している様子がみられる。S T 340～360完掘、S T 370掘り下げ。7日、雨の中、S D 70・S T 370を掘り下げる。8日、S D 70・40、S T 370を掘り下げ。同土層図（1/10）作成。S T 330完掘。13日、昨日の雨は、久留米のアメダスで24時間降水量100mmに達し、現場は完全水没。排水作業を行う。14日、S I 400掘り下げ。16日、降雨で作業中止、17・20日排水作業。21日、S T 410～440の掘り下げを行う。S T 410からは、永楽通寶など中国銭3枚、S T 440からは土師器坏2点、小坏1点が出土。22日、S D 70とS T 450・460・490完掘。23日、S K 510完掘。27・28日、排水作業。29日、気球写真のための調査区清掃。30日、気球写真撮影。S T 560～580掘り下げ完掘。夕方から土砂降りに。

7月1日、S I 500掘り下げ、ベッド状遺構が巡る構造に。布留式甕が多く出土。古墳時代初頭。S T 590完掘。2日、S I 500完掘。4日、円形周溝墓を切り込む形で、中世の土壇墓4基を検出。ほかにもS T 610など切り合い不明の3基が重複する。5日、昨夕の前線南下にともなう降雨で、調査区帯水。排水作業と並行しながら、埋め戻し作業を開始する。6日、前線再北上、翌日朝までの降雨量は久留米のアメダスで170mmを超える。7日、現場は水没しており、排水作業。8日、排水作業と並行して埋め戻し作業を行う。同日器材撤収し、現地調査終了する。

調査終盤は連日の雨に悩まされ、降雨とその後の排水作業の繰り返しで、遅々として作業が進まなかった。平成23年（2011）の北部九州の梅雨入りは5月21日頃で平年よりも2週間ほど早く、梅雨明けは7月8日頃で、こちらも平年よりは10日ほど早かった。梅雨の期間は、ほぼ東半部の調査期間と重なり、例年以上に降水量も多かった。例えば、6月では降雨が無い日はわずか11日、日雨量10mm以上の日は11日間に及び、月総雨量は507.5mm、例年の1.49倍の量であった。

Ⅲ－2）基本層序

調査以前の現地は、テニスコートであった。このため、最も新しい層はテニスコートの舗装面と

その下部の客土層（約40cm）であるが、調査区内では解体時に客土層の厚さ10cm分を残して除去されていたことはⅠ章でも述べた。その下部の層序は、調査区東半部南辺中央付近で、暗灰色土（耕作土）：10cm、灰色土（旧耕作土）：5cm、上面に鉄分が沈着する黒褐色土（包含層）：12cmとなり、褐色粘質の地山に到る。ただし、包含層の残存範囲は調査区南辺部分以外では局部的であり、調査区中程では耕作土直下が地山土となっている。一方、調査地北側は広川の氾濫原に面しているため、調査区内北辺部の地山面は、北側に向かって傾斜している。このため、ここでも包含層が厚く堆積しており、北辺中央部では約50cmにのぼった。

Ⅲ－3）検出遺構

調査の結果、弥生時代の壺棺墓1基、古墳時代の竪穴住居16軒、溝2条、土坑5基、奈良時代の土坑1基、室町時代の円形周溝墓1基、土壇墓37基、近世の可能性のある井戸1基を検出した。なお、遺構番号は300番で分割しており、それ以前の数字は調査区の西半分、それ以降は東半分で検出した遺構である。以下では、遺構種別ごと、かつ番号順に記述する。

〔竪穴住居〕

S I 10（図3・4・24，図版3）

調査区南西部で検出した。平面プランはほぼ正方形に近く、東西長6.27m、南北幅6.07m、深さ34cmを測る。西側1/3程が調査区外へ延びるが、三方のコーナーを確認しており、そこから推定すると床面積は約38㎡になるだろう。覆土は人為的埋土で大きく3層に分かれ、住居の周辺部分から酸化した地山系の褐色土、淡茶褐色土・茶褐色土の小ブロックや粒子混じりの土で埋め戻されている。支柱穴は4本と推定されるが、調査区外へ出るためか、東側の2本分しか検出できていない。床面からの深さは、北側のものが28.2cm、南側のものが22.2cmである。その柱間寸法は芯々で3.15mを測る。床面中央には、深さ8.4cmの炉がある。その西側にも隣接して、炉と考えられる窪みがあり、二段掘りされ中央部はやや深くなる。床面からの深さは、14.4cmである。両者ともに炉内には炭化物粒子や焼土粒が多く混入しており、それぞれに土師器の甕がつぶれた状態で埋まっていた。床面や壁面には、小型丸底壺などとともに炭化材や焼土などが散見される。炉の東側では、住居中央から放射状に延びる炭化材とそれに直交する炭化材が検出されており、竪穴住居の小屋組部分が焼け落ちたものと考えられる。また、南壁際中央部にある屋内土坑p1の東側には、焼土層と炭化した木材が厚さ15cm以上堆積した箇所がある。住居壁面に沿って、断続的に壁溝が見られる。切り合い関係はない。主軸方位は、真北から約24.2°西に振れる。

出土遺物には、土師器の坏・鉢・高坏・甕・小型丸底壺・手づくね土器、弥生土器・黒曜石片などがみられる。古墳時代中期頃に比定される。

S I 20（図3・5・24，図版4・5）

調査区南西隅部で検出した。西側にS I 10が隣接する。平面プランは正方形に近い。同位置で2軒が重複しており、小形の住居を埋め戻した後、プランを拡張して建て替えたものと思われる。

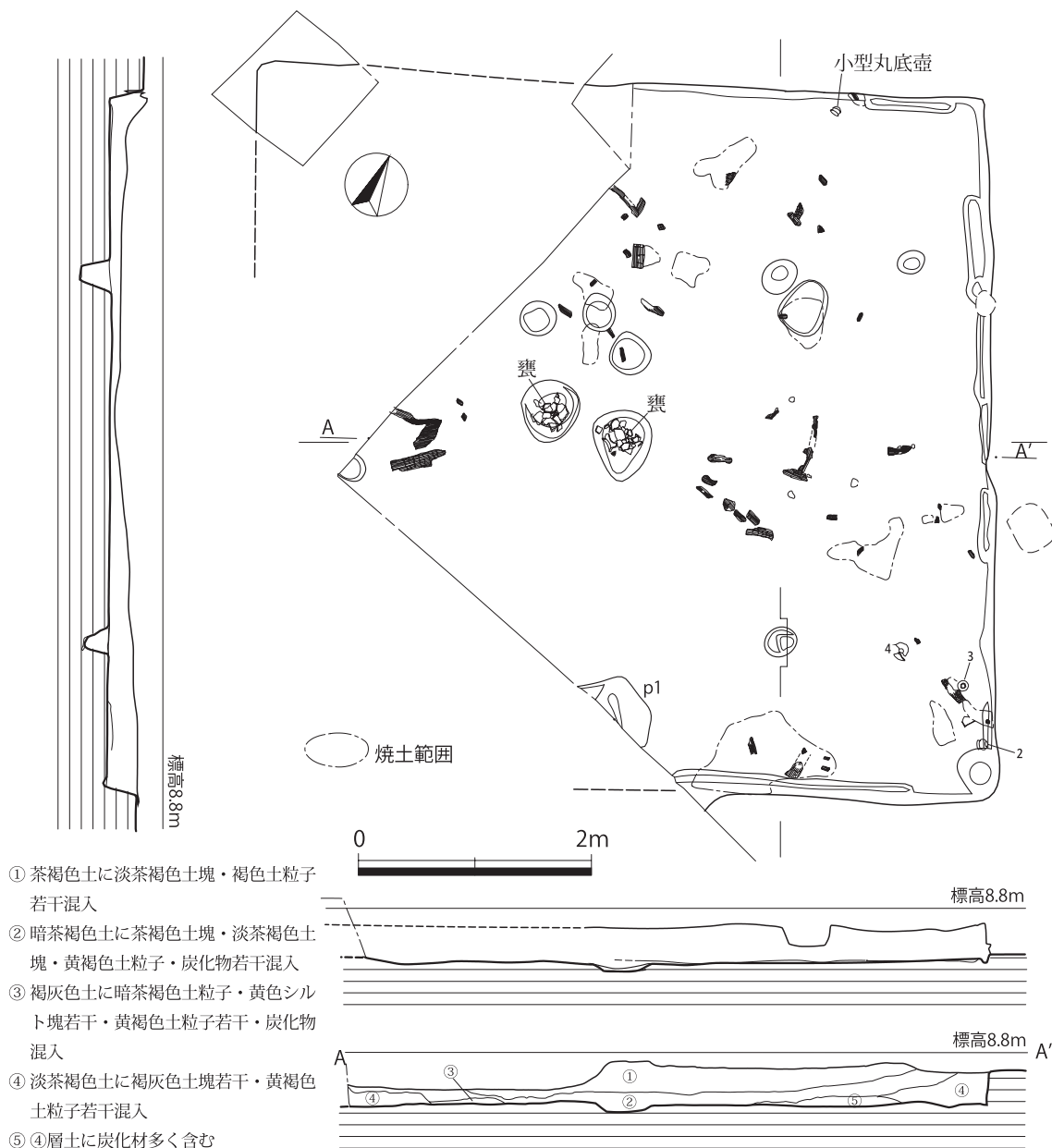


図4 S I 10平面・断面見通し・土層図 (1/60)

旧段階は南北長5.85m、東西幅5.38m、残存する最大深26.5cmの規模を測る。床面中央付近には、炉と思われる浅い土坑が認められるが、柱穴については明確でない。住居の床面の周囲は10～15cmほどの深さで幅広く掘り込まれているが、その底面は凹凸が著しい。この部分は埋め戻されて、貼床を形成している。住居の廃絶時には、褐色土＋淡茶褐色土＋茶褐色土＋黄褐色シルトブロックが混じり合う土で埋め戻している。上端内での推定面積は、約30㎡である。

新段階は拡張された大形の住居である。旧段階の埋土が土間の三和土状となり、床面中央部は特に硬化が著しく、表面が凸凹になっている。その規模は、南北長6.51m、東西幅5.74m、深さ約35cmである。柱穴は判然としないが、西辺中央付近には炭化物粒子混じりの焼土が集中する範囲があり、カマドを取り崩した跡と思われる。一方、東辺中央付近には、床面からの深さが約25cmある

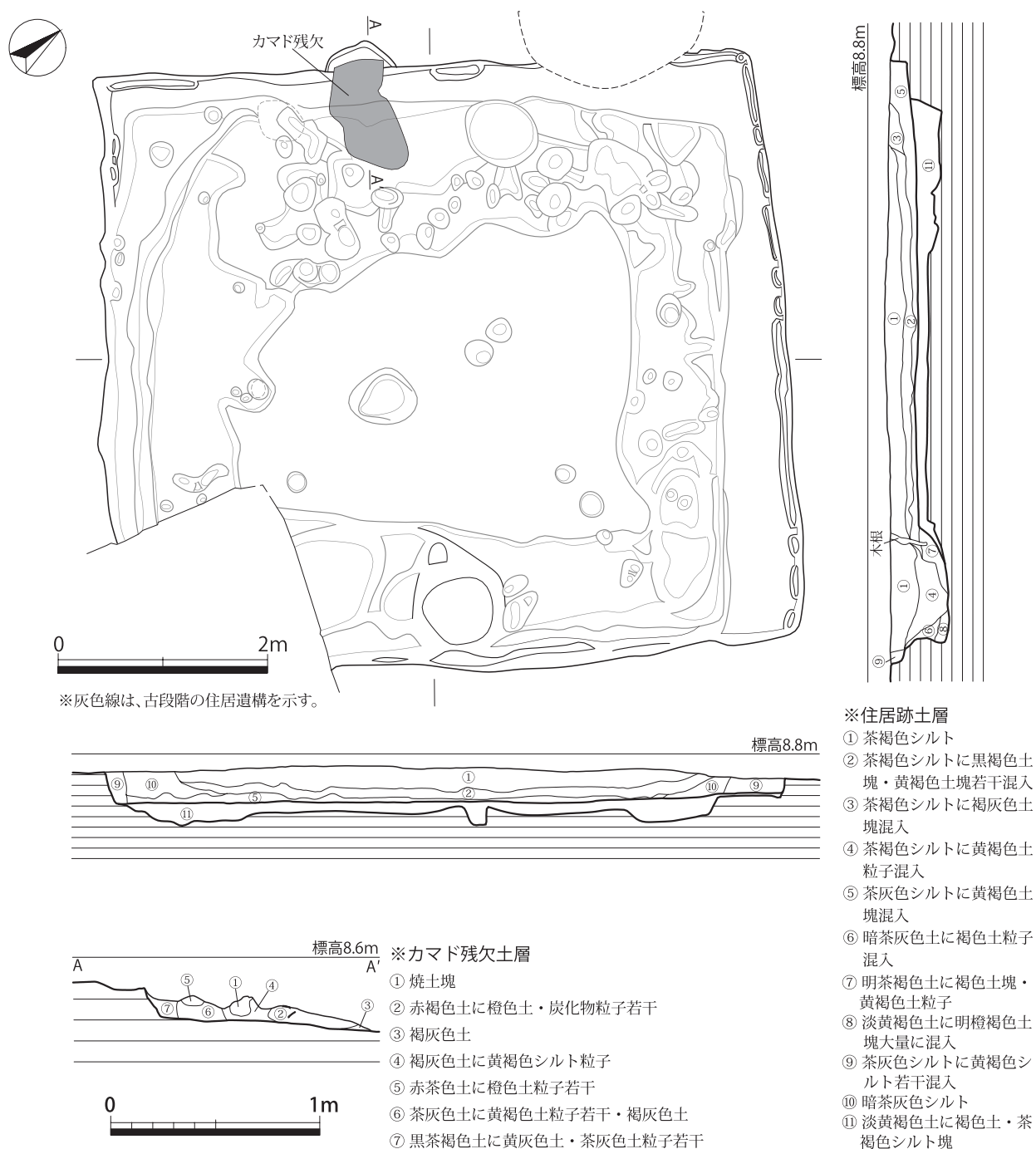


図5 S I 20平面・土層図 (1/60) カマド残欠土層図 (1/30)

屋内土坑が存在する。また、全周しないが、住居の北辺を中心に断続的に壁溝が見られる。主軸方位は、真北から約 51.3° 西に振れる。上端内での推定面積は、約 37m^2 である。なお、切り合い関係からS K 30に先行する。

出土遺物には、土師器の丸底坏・高坏・小壺・甕・甌・手づくね土器、滑石製の小玉などがある。古墳時代同中期中葉頃に比定される。

S I 50 (図3・6・15, 図版5)

調査区中央部西寄りで検出した小形の住居跡である。平面プランは正方形に近く、南北長 4.59m 、

東西幅4.35mを測るが、深さは7cm以下と残りは悪い。西辺中央付近に接して、炭化物粒子混じりの焼土が床面に堆積する部分があり、カマドの残穴ではないかと思われる。また、支柱穴は明確ではない。床面中央部には土師器の甕片が集中して発見された。主軸方位は、真北から約70°西に振れる。上端内での推定面積は、約19.9㎡である。なお、切り合い関係から、S T130に先行する。

出土遺物には、土師器の甕、須恵器の坏蓋がある。古墳時代後期後半頃のものと思われる。

S I 60（図3・6・24，図版6）

調査区中央部西寄りで検出した。S I 50の西に隣接する。平面プランはほぼ正方形で、一辺の長さが5.89～6.0m、深さ23.6cmである。覆土は二層に分かれ、まず住居周囲から壁際に淡褐色シルト（わずかに酸化した地山土）が堆積している。住居中央の窪みには黒褐色土が堆積して、この層の下部には土師器片が含まれるが、二次的に被熱を受けて脆い状態の細片がほとんどである。床面からは、炭化物や焼土が若干量と、土師器の小型丸底壺、高坏などが出土した。床面の壁際には断続的に壁溝がめぐるものの、柱穴や炉などは明確でない。主軸方位は、真北から約35.3°西に振れる。上端内での面積は、約35.9㎡である。

他に須恵器細片・弥生土器・青磁・染付・陶器細片が各1点含まれるが、近現代の耕作に関わる遺構が重複しているために混入した可能性が高い。

S I 90（図3・24，図版7）

調査区中央部北寄りで検出した。硬化し、地山よりもやや酸化が進んだ色調を呈することから住居跡と判断した。住居の壁は削平され、床面の一部が残るのみと考えられる。住居の平面プランは、方形～長方形と思われ、現状では長さ約3.7m、幅約3.2mの規模である。柱穴や炉・カマド等は明確ではない。出土遺物として、土師器の鉢・高坏・小型丸底壺・甕・手づくね土器がある。

S I 100（図3・7・24，図版7）

調査区北西隅で検出した。平面プランは横長の長方形で5.05m×4.78m、深さは15.6cmである。北辺中央部には、炭化物粒子が混じる焼土が堆積し、これはカマドを取り崩した跡ではないかと思われる。反対側の南辺中央部付近には、楕円形の平面プランを呈する浅い屋内土坑がある。床面からの深さは12.6cmを測る。また、西辺と南辺の一部には壁溝が残る。S I 10と切り合い関係にあり、後出する。主軸方位は、真北から約44.1°西に振れる。上端内での推定面積は、約24.4㎡である。

出土遺物には、土師器の丸底坏のほか、須恵器の甕、黒曜石剥片などがある。

S I 110（図3・7，図版7）

調査区北西隅で検出した。平面プランはほぼ正方形で、西壁中央部にカマドを取り壊した跡がある。規模は、東西長4.207m、南北幅3.865m、深さ19.2cmである。4本柱構造と思われるが、確認できたのは北西部分を除く3本である。柱穴の直径は12～30cm、床面からの深さは20～25cmである。南側と東側の壁際には、断続的な壁溝が認められる。主軸方位は、真北から約61°西に振れる。上端内での推定面積は、約16.6㎡である。

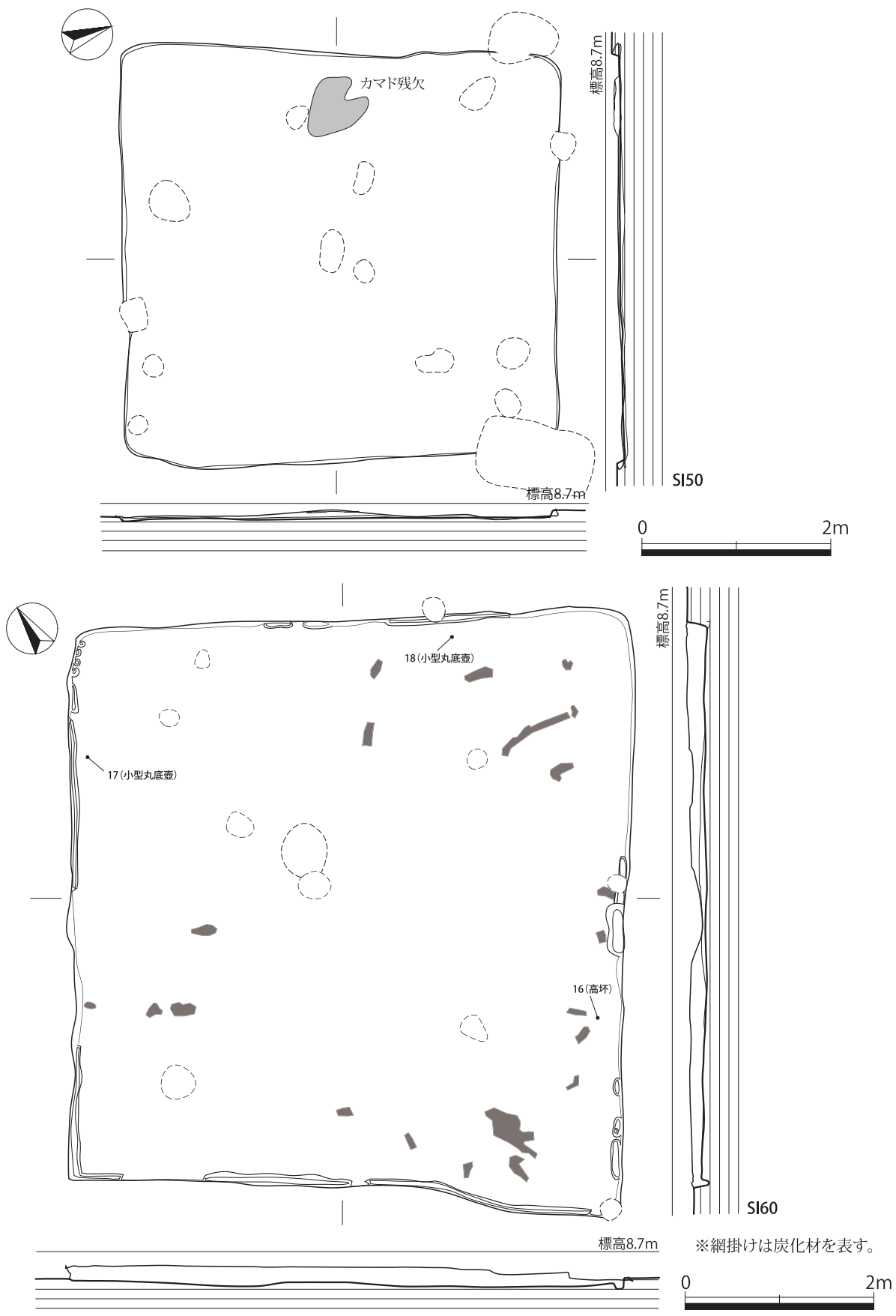


図6 S I 50・60平面・断面見通し図 (1/60)

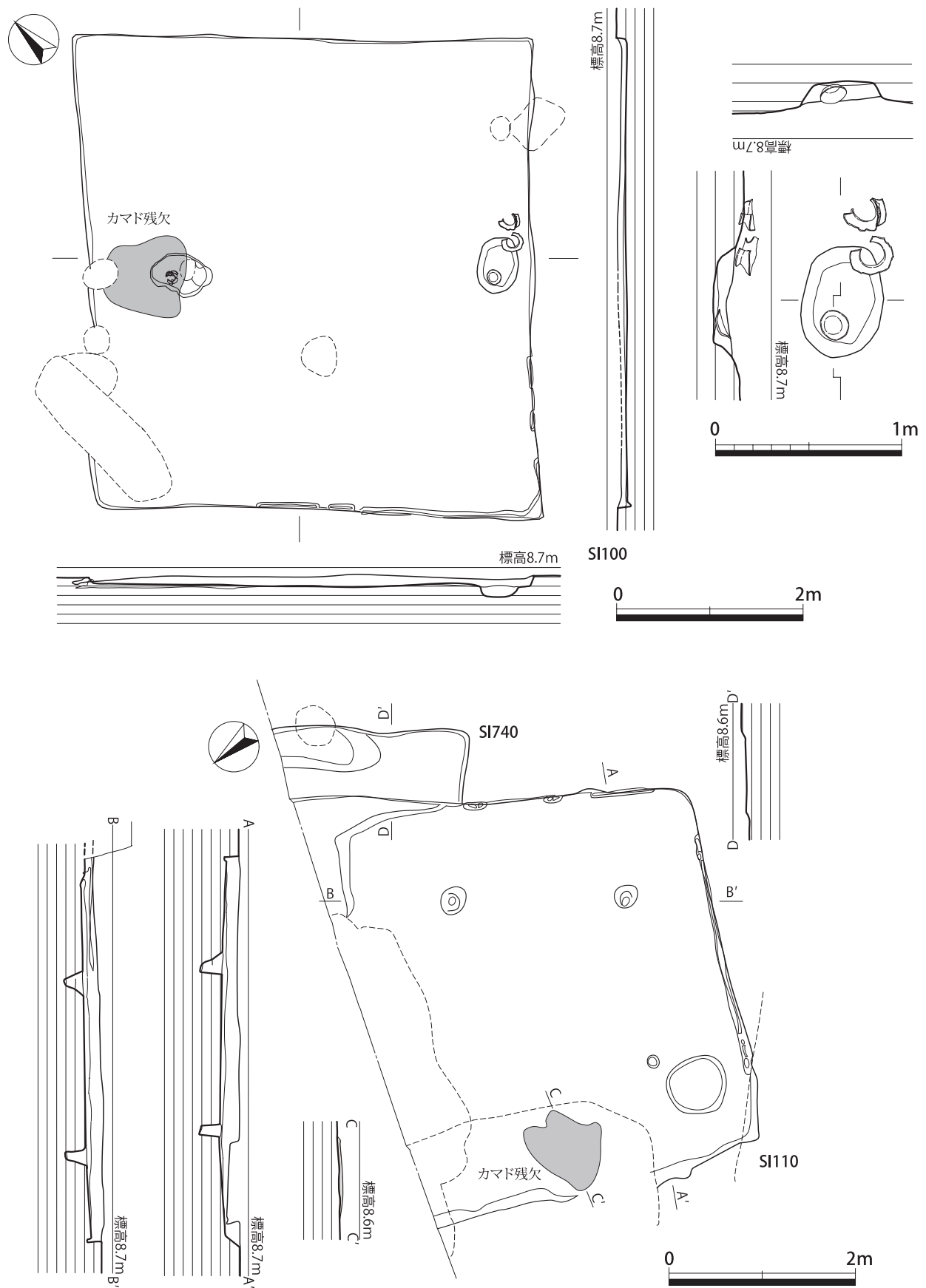
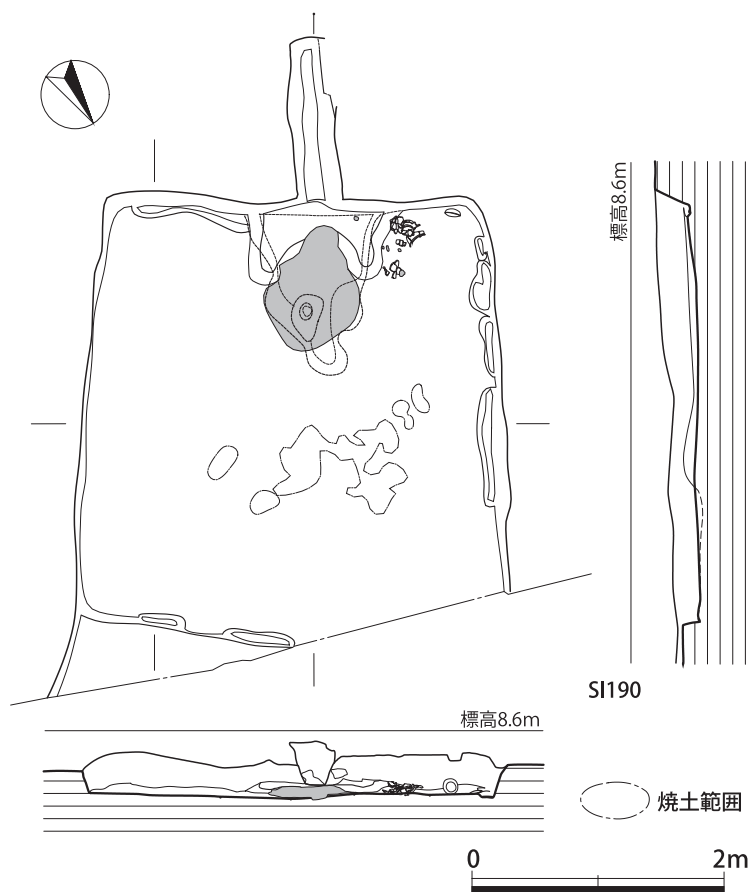


図7 S I 100・110・740平面・断面図（1/60）、S I 100屋内土坑遺物出土状況（1/30）



出土遺物には、土師器の丸底坏・高坏、須恵器の坏蓋・壺・甕などが見られる。切り合い関係から、S I 740より後出し、S I 100、S K 120に先行する。

S I 190 (図3・8・9・24, 図版8)

調査区北壁面中央部で検出した小形の竪穴住居である。方形プランで、規模は南北長3.45m、東西幅3.376m、深さ39.3cmである。南壁中央部にカマドを設置し、戸外へ幅35cm、長さ1.3mの煙道が延びる。煙道は残りがよく、一部に天井部を残していた。カマドは基底部分が残るのみで、焚き口付近には炭化物を含む焼土の広がりが認められる。カマドの向かって右手床面には、土師器の甕片や

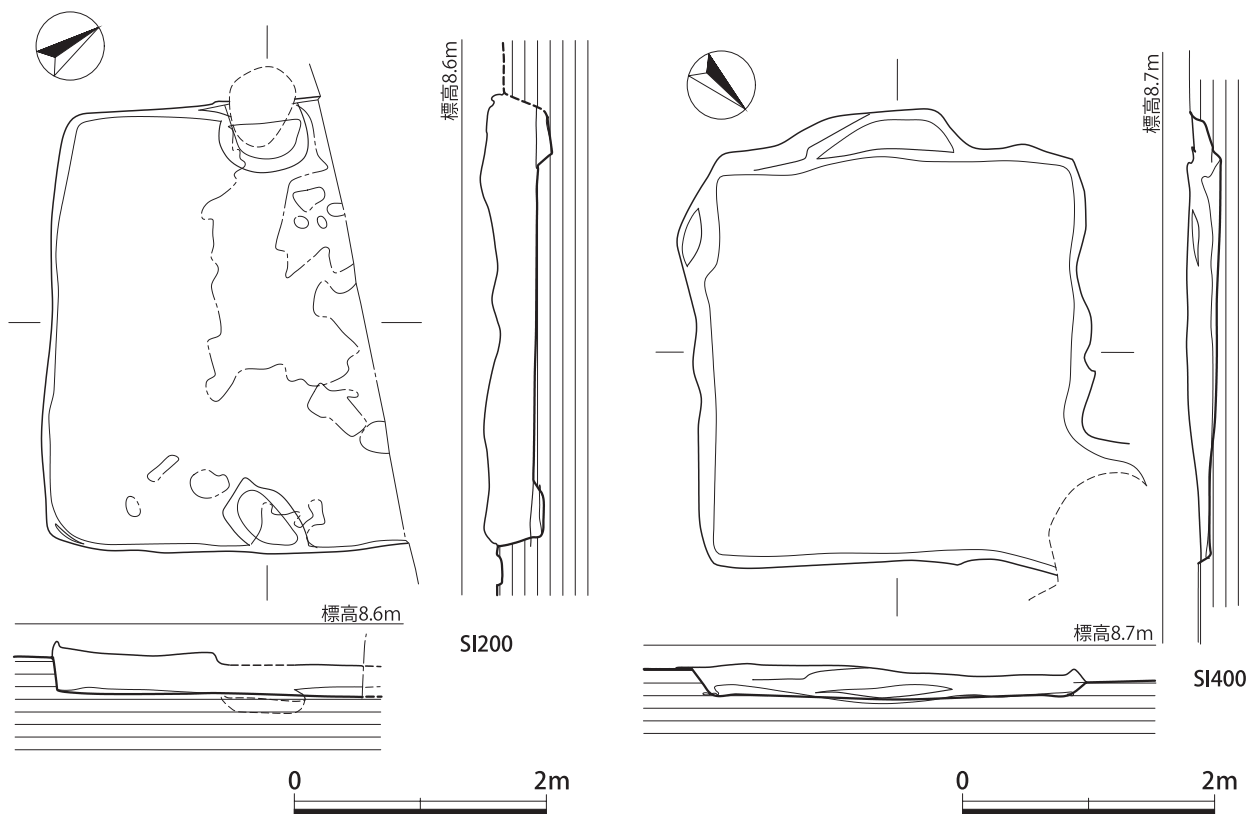


図8 S I 190・200・400平面・断面図 (1/60)

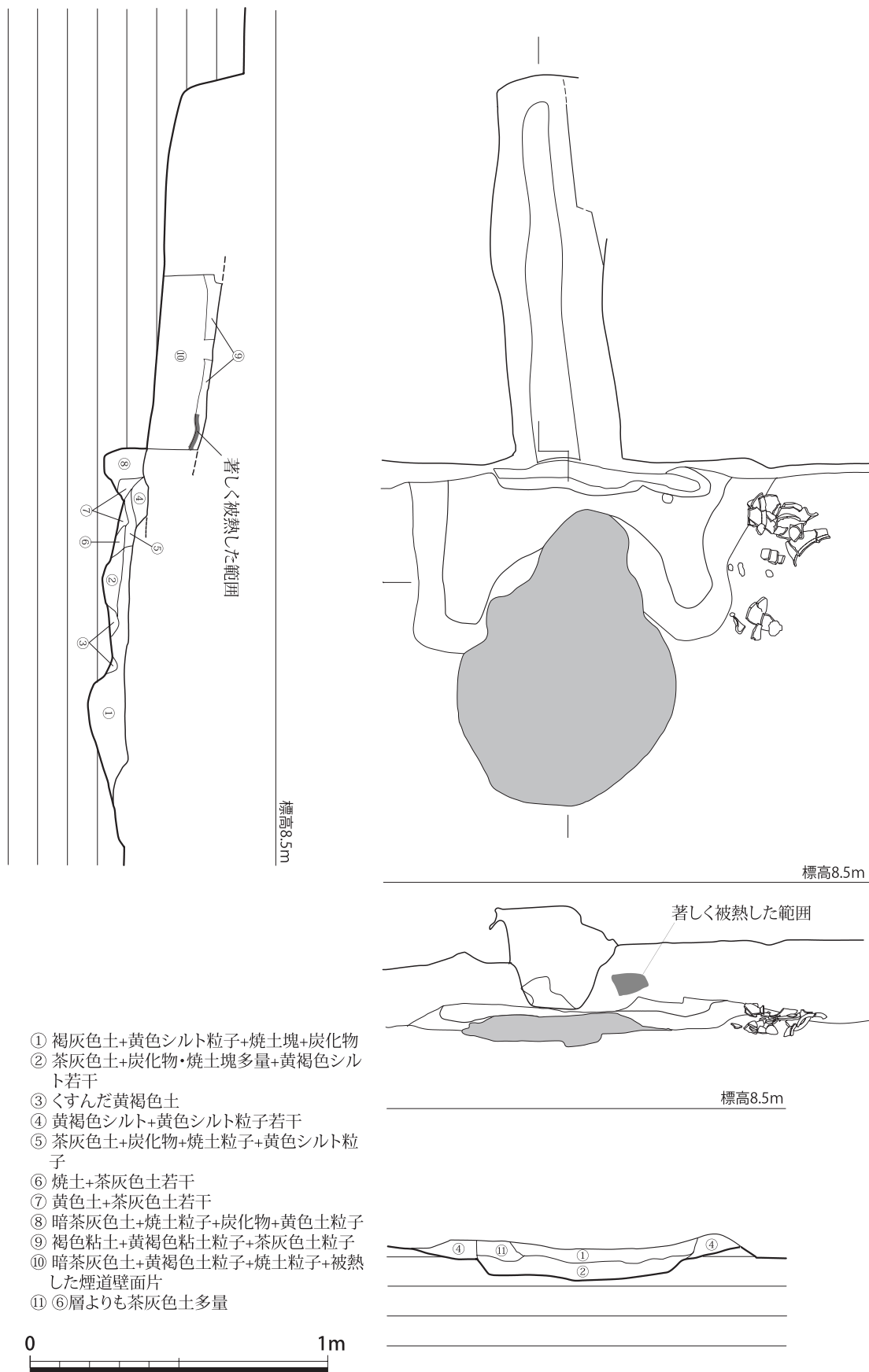


図9 S I 190カマド平面・断面見通し・土層図 (1/20)

丸底坏がまとまって出土した。床面は黄色土に達しており、貼床はなく硬化している。その中央部にも焼土が広がる。柱穴の痕跡は発見できなかった。壁際には断続的に壁溝が認められる。主軸方位は、真北から約147° 西に振れる。上端内での推定面積は、約11.7㎡である。切り合い関係から、畝状遺構 S X800に先行する。

出土遺物には、土師器の丸底坏・高坏、須恵器の坏蓋・坏身が見られる。

S I 200 (図3・8, 図版9)

調査区北壁面中央西寄りで検出した小形の堅穴住居である。北側1/3ほどが調査区外へ延びる。プランは方形になるものと思われ、東壁際に床面からの深さ9.4cmの土坑、西壁際にカマドの残穴の可能性が考えられる深さ13.3cmの窪みがある。このそれぞれの中央を通るラインを中軸線として設定して線対称に折り返すと、その規模は東西長3.6m、南北幅3.4m、深さは41.1cmとなる。カマドの可能性のある西壁沿いの窪みから東方に向けての床面上には、炭化物を含む焼土が広がる。廃絶の際は、各種ブロック土混じりの土で人為的に埋め戻されている。主軸方位は、真北から約55.1° 西に振れる。上端内での推定面積は、約12㎡である。

出土遺物には、土師器の高坏や須恵器の坏蓋・坏身・壺片などがある。

S I 380 (図3, 図版2)

調査区東端部中央北寄りで検出した小形の堅穴住居である。削平が著しく壁は残らないが、地山面の変色部分が認められることから、これが床面の範囲を示すものと考えた。プランは方形だが、柱穴は確認できなかった。規模は、南北長3.25m、東西幅2.7m以上である。

S I 400 (図3・8・25, 図版9)

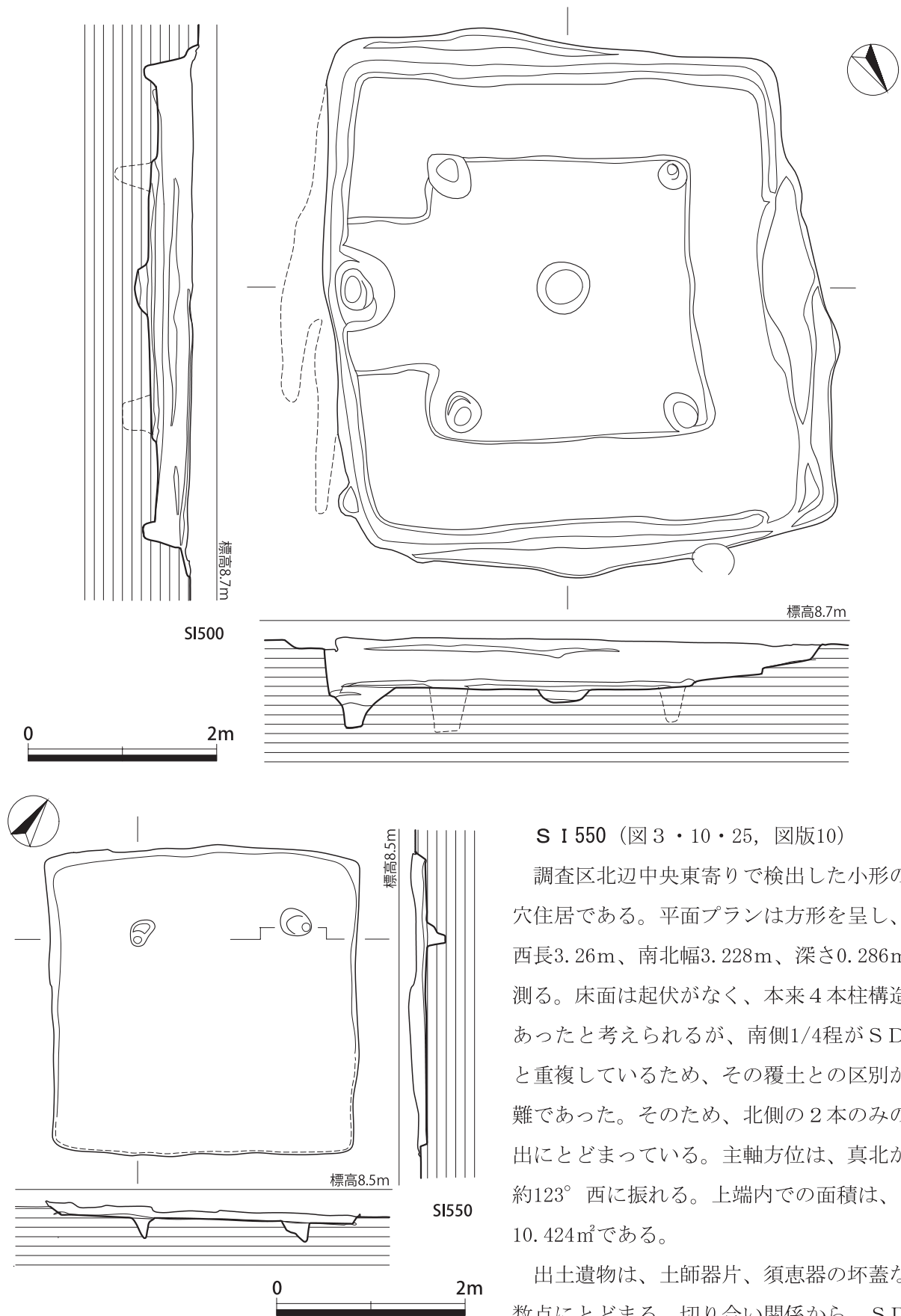
調査区北辺中央東寄りで検出した、方形プランの堅穴住居である。南北長3.267m、東西幅3.116m、深さ0.31cmを測る。南辺中央に幅約22cmのステップがあり、こちらが出入り口と思われる。また、床面には柱穴が確認できなかった。主軸方位は、真北から約47° 東に振れる。上端内での推定面積は、10.5㎡である。

出土遺物には、土師器の丸底坏・二重口縁を有する壺・小壺・小型丸底壺・高坏・甕などがあるが、S D40と重複するためか、須恵器片が3点混入する。切り合い関係から、S D40に先行する。

S I 500 (図3・10・25, 図版9)

調査区北東隅部で検出した。プランは方形で、その規模は東西長5.306m、南北幅5.221m、深さ55.4cmを測る。西壁中央付近に階段状のステップが造り出され、対面の東壁中央に屋内土坑がレイアウトされている。床面中央には炉があり、灰が2層堆積している。柱は4本柱で、床面からの深さは31.2～57.4cm、その周囲にはベッド状遺構をめぐらす。また、ベッド状遺構と壁の間には、壁溝をめぐらす、出入り口の階段部分には存在しない。主軸方位は、真北から約56.5° 西に振れる。上端内での推定面積は、約27.2㎡である。

覆土中からの出土遺物は多く、土師器の小形丸底壺・高坏・鉢・壺・甕などがあるが、布留系のものが多く含まれる。ほかにも、砥石や紡錘車などが含まれる。



S I 550（図3・10・25，図版10）

調査区北辺中央東寄りで検出した小形の竪穴住居である。平面プランは方形を呈し、東西長3.26m、南北幅3.228m、深さ0.286mを測る。床面は起伏がなく、本来4本柱構造であったと考えられるが、南側1/4程がSD40と重複しているため、その覆土との区別が困難であった。そのため、北側の2本のみの検出にとどまっている。主軸方位は、真北から約123°西に振れる。上端内での面積は、10.424㎡である。

出土遺物は、土師器片、須恵器の坏蓋など数点にとどまる。切り合い関係から、SD40に先行する。

図10 S I 500・550平面・断面見通し図（1/60）

S I 740 (図3・7, 図版1)

調査区北西隅で検出した。検出したのは南東コーナーのみで、プランのほとんどが調査区外へ延びるため、詳細は不明である。ただ、平面形状は方形、もしくは長方形プランで、壁際にベッド状遺構を持つタイプのようなのである。出土遺物はなく、切り合い関係から S I 110 に先行する。

S I 750 (図3, 図版2)

調査区南辺中央東寄りで検出した。一辺3.2m程の方形プランの住居と考えられるが、壁はほとんど残らず、西半は S D 70 に破壊されているため、詳細は不明である。切り合い関係から、S D 70 に先行する。

〔土坑〕

S K 30 (図3・11, 図版10)

調査区南西部で検出した。平面プランは楕円形で、断面形状は船底形を呈する。規模は、南北長1.74m、東西幅1.43m、深さ34cmを測る。覆土は自然堆積で、底部からは叩き石が出土した。その他に土師器の細片が2点認められる。切り合い関係から、S I 20 より後出する。

S K 120 (図3・11, 図版1)

調査区北西隅部で検出した。平面プランは楕円形であるが、1/3程は調査区外へ延びると思われる。二段掘りされているものと考えたが、本来は別遺構である可能性も残す。規模は、南北長2.5m以上、東西幅2.35m、深さ23cmを測る。出土遺物には、土師器、須恵器の壺・甕片などがある。切り合い関係から、S I 110 より後出する。

S K 230 (図3・11, 図版11)

調査区西辺中央北寄りで検出した。平面プランは不整な円形であるが、西側の突出部は別遺構のピットが重複している可能性もある。断面形状は、西に向かって階段状となっている。規模は、南北長0.79m、東西長0.82m、深さ21cmである。

出土遺物には、土師器の高坏や小形の鉢などのほか、黒曜石剥片がある。

S K 240 (図3・11, 図版11)

調査区西辺中央北寄りで検出した。平面プランは楕円形を呈する。平面プランや主軸方位、覆土の状況から当初土墳墓の可能性があると考え掘り下げたが、他の例よりも深く、底面が狭くなるため、ここでは土坑として扱った。規模は南北長1.18m、東西幅0.68m、深さ0.96mである。

出土遺物は、土師器の細片4点のみである。

S K 510 (図3・11, 図版11)

調査区南東部で検出した。平面形は、やや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は東西長1.23m、南北幅0.88m、深さ、30cmである。切り合い関係から、S T 520 に先行する。

出土遺物には、土師器の椀などがあるが、いずれも細片で点数も少ない。

S K 760 (図3・11, 図版2)

調査区北東隅部で検出した。平面プランは円形で、断面形状は船底状を呈する。規模は直径1.16

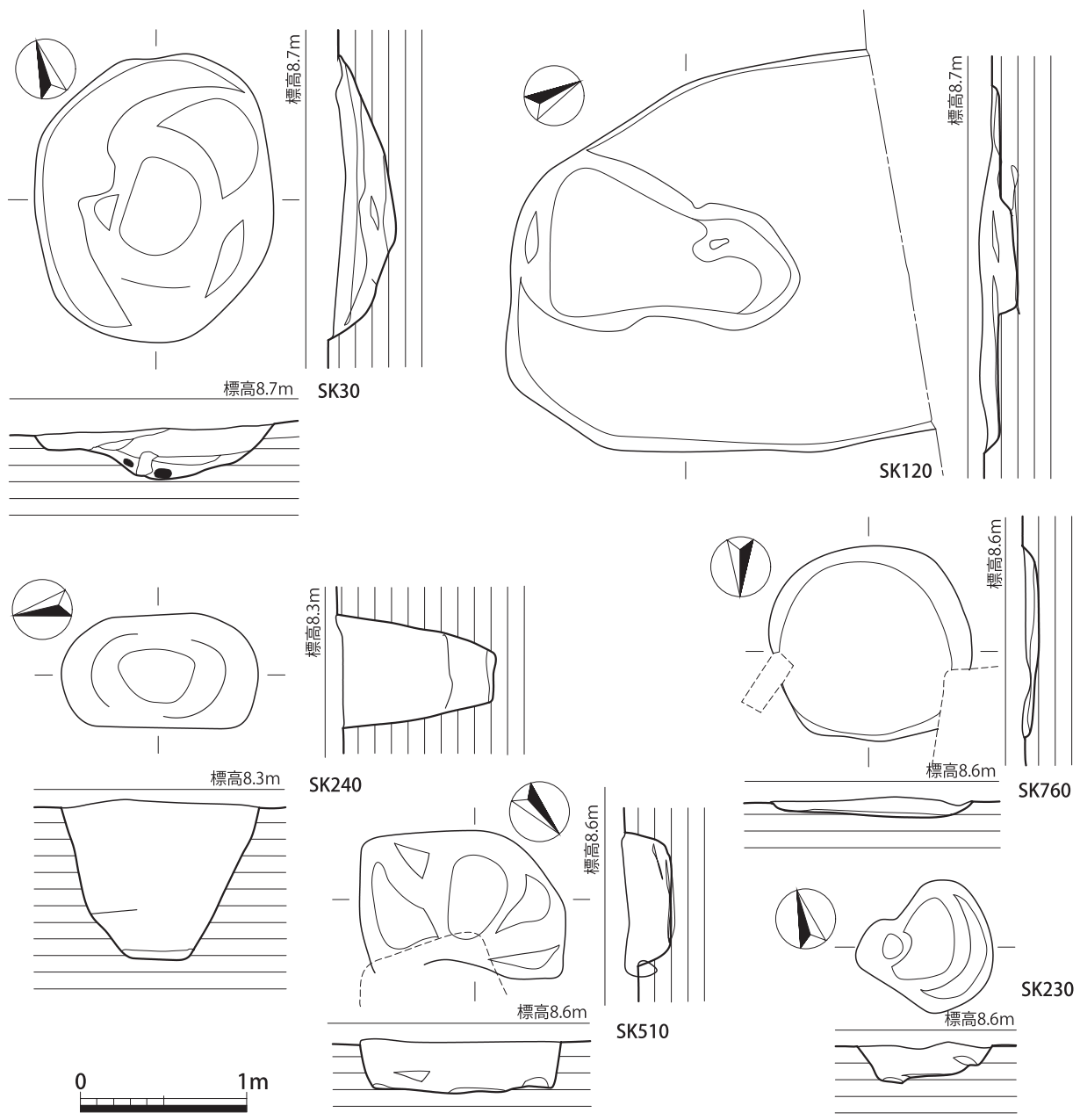


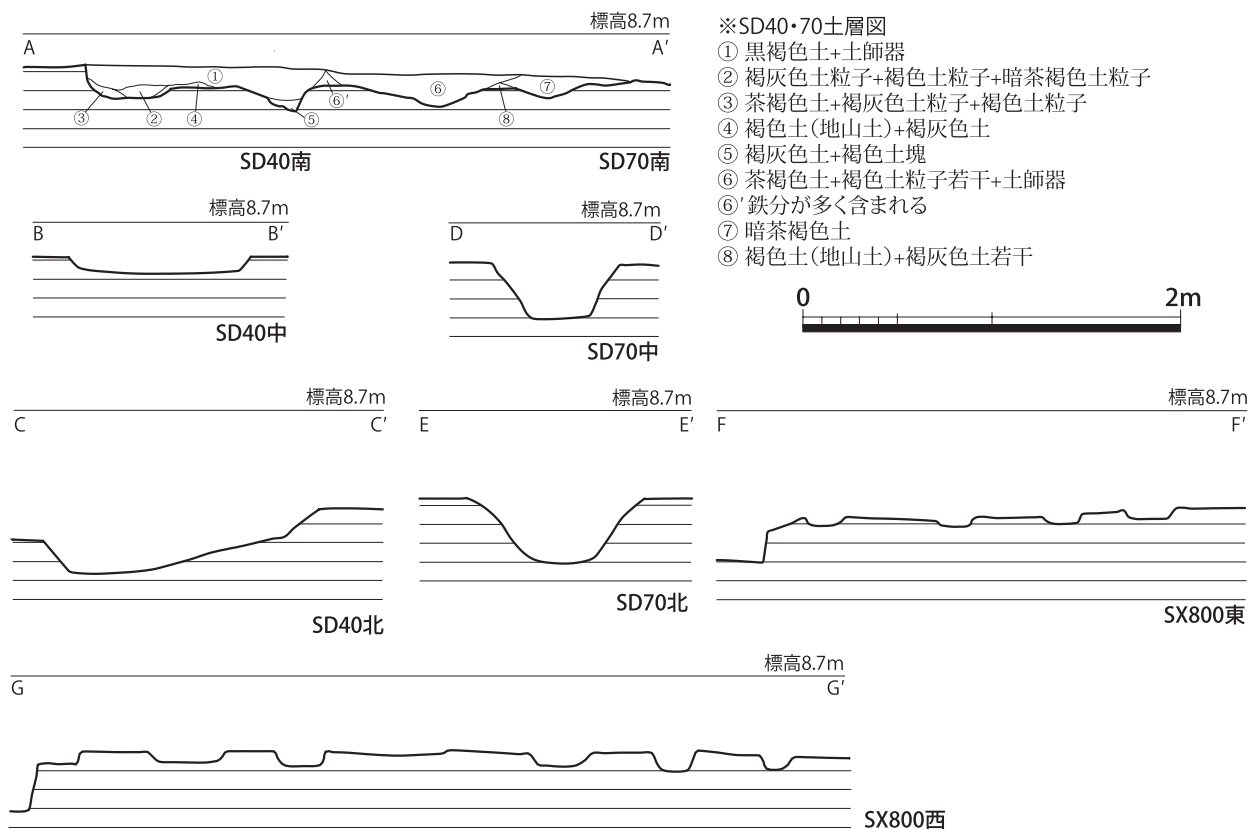
図11 S K30・120・230・240・510・760平面・断面見通し・土層図（1/40）

～1.26m、深さ12cmである。出土遺物はない。切り合い関係から、S T310に先行する。

〔井戸〕

S E300（図3・12，図版12）

調査区南壁際中央東寄りで検出した。旧耕作土と包含層上面から掘削された円形プランの素掘り井戸だが、1/3程度は調査区外へ延びる。現状では直径1.8m程あるが、土層観察の結果、これはある時期に井戸の壁面が崩壊したことによって周囲が陥没し広がったためであり、本来の直径は70～80cm程である。周囲が陥没した後、埋め戻され、その上に耕作土層が調査区の壁が崩壊する危険があるため、80cm程掘り下げた時点で掘削を中止したが、更に1m以上の深さがある。出土遺物は、



※SE300土層図

- ① 真砂土(テニスコート造成時の客土)
- ② 暗灰色土(耕作土)
- ③ 灰色土(耕作土)
- ④ 灰褐色土(耕作土)
- ⑤ 黄褐色シルト+灰白色シルト塊+灰色土塊+褐色土塊
- ⑥ 黒褐色土(包含層)
- ⑦ 褐色土(地山上面土)
- ⑧ 褐色土+緑灰白色土
- ⑨ 灰褐色砂質土+黄褐色シルト塊若干
- ⑩ 灰白色シルト+黄褐色シルト塊+灰色土塊若干
- ⑪ 灰白色シルト+灰色土塊若干
- ⑫ 灰白色砂質土+黒褐色土塊・灰色土シルト塊・褐色土塊若干
- ⑬ 灰色土+灰白色砂質土
- ⑭ 灰白色砂質土+灰色土塊若干
- ⑮ ややくすんだ黄褐色シルト



図12 SD40・70、SX800、SE300断面・土層図 (1/20・1/40)

上面から出土した土師器細片が5点のみである。切り合い関係から、S T 330より後出する。

〔溝・畝状遺構〕

S D 40（図3・12・24，図版12）

調査区を横断するように走行する南北溝である。南端付近で東から北方向へ屈曲し、中程からは緩やかに北東方向へカーブする。約45m分を確認したが、なおも両端は調査区外へ延びる。幅は1.25～1.4m、深さは25～35cm程度である。溝底面レベルは、中程まではそれほどの変化はないが、北端部近くなると傾斜を強めレベルを下げていく。断面形状は上部が開くU字形で、南端部では底面の凹凸が著しい。覆土は黒色土系の自然堆積土で、層の境界付近は漸移的である。

出土遺物に、土師器の模倣坏・鉢・高坏・甕・ミニチュア土器、須恵器の坏蓋、甕、黒曜石剥片などがある。古墳時代後期に属する。切り合い関係から、S I 400、S D 70より後出し、S I 550、S T 370・630・680・690に先行する。

S D 70（図3・12，図版12）

調査区を直線的に斜行する南北溝である。調査区内で42m分を確認したが、両端部は調査区外へ延びている。底面レベルは、低台地端の北側へ向かって徐々に下がってゆく。溝幅は0.65～1.0m程で、深さは18～32cm程である。溝の覆土は、黒色土系の自然堆積土で、S D 70と酷似しており、区別が難しい。

出土遺物には、土師器の高坏・甕、須恵器の甕などがある。切り合い関係から、S I 750より後出し、S D 40に先行する。

S X 800（図3・12，図版1）

調査区北壁際中央付近で検出した小溝群である。低台地の北斜面に20～40cm間隔で、幅15～40cm、深さ5～10cm程の浅い南北溝が並ぶ。覆土は淡茶褐色土で、出土遺物は土師器細片のみである。これらの状況から、畝立て法による畑作の痕跡であると考えておきたい。

切り合い関係から、S I 190・200、S T 180に先行する。

〔墳墓〕

S T 220（図3・13・26，図版13）

調査区南西隅で検出した弥生時代早期の壺棺墓である。墓壙の平面プランは不整円形で、南北長0.755m、東西幅0.825m、深さ33cmを測る。墓壙は上部が大正時代の耕地整理のため、削平されていたが、その内部には、ミガキを施し丹塗りで仕上げた大形の壺が仰角42°で安置され、墓壙内は淡茶褐色シルトで埋め戻されていた。また、壺の内部には、夜臼式の刻目突帯文を有する深鉢が落ち込んだ状態で検出されてい

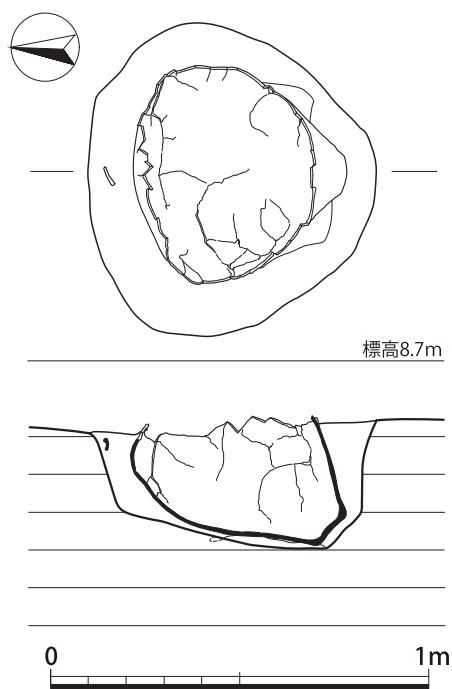


図13 S T 220平面・断面図（1/20）

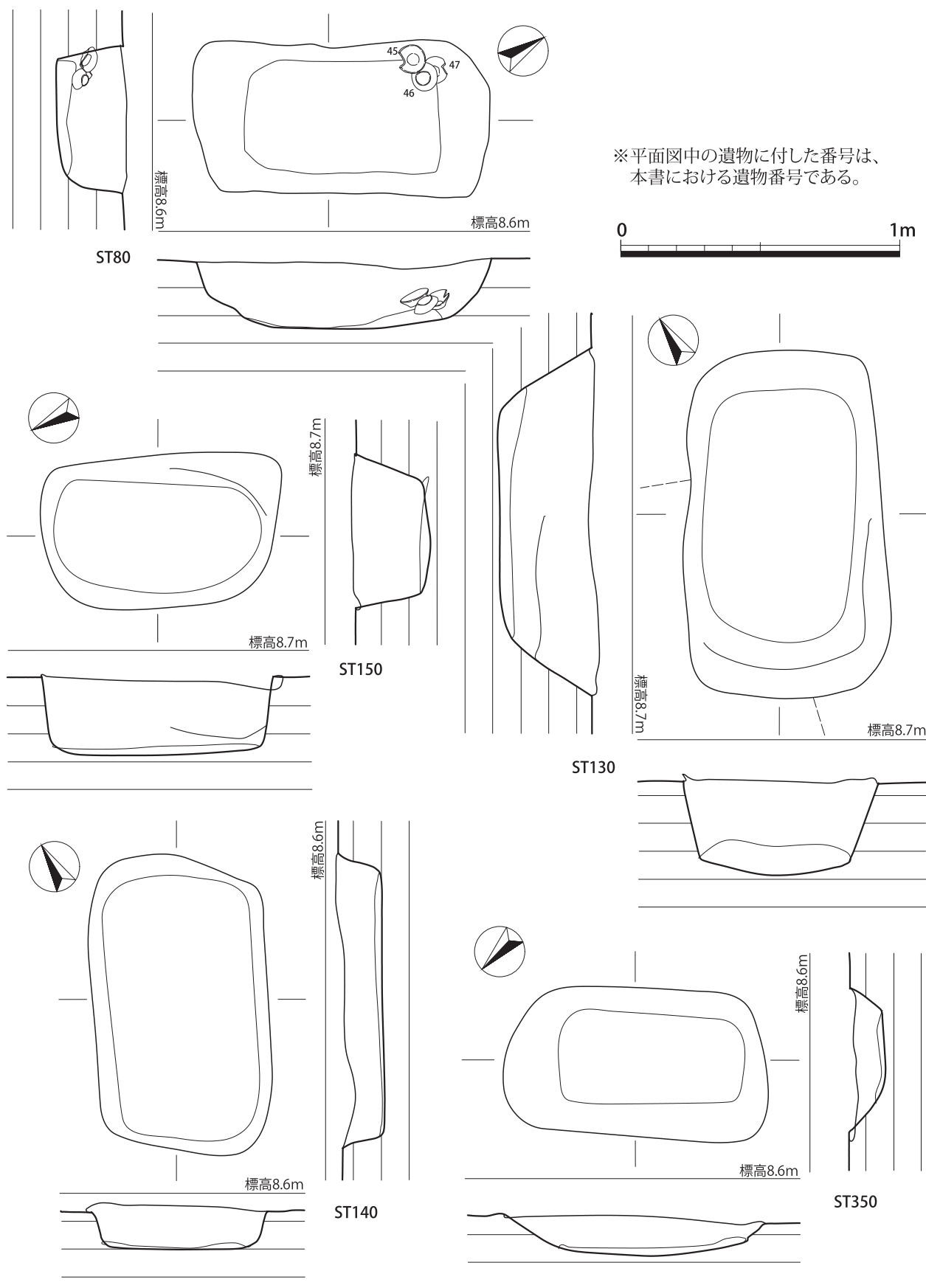


図14 ST80・130・140・150・350平面・断面見通し図 (1/20)

る。これが壺棺の蓋として利用された可能性が高い。主軸方位は真北から 2.049° 西に振れている。

S T 80（図3・14・27，図版13）

調査区南辺中央付近で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形で、断面形状は船底状である。規模は、長さ1.065m、幅0.555m、深さ25cmを測る。墓壙の北西隅部からは、副葬品と考えられる土師器の坏3個が出土した。そのうち2個は、当初口を合わせて置かれたものが、墓壙内部に落ち込み、底面付近からズレた状況で検出された。主軸方位は 31.64° 東に振れている。上端内での面積は、 0.546m^2 である。出土遺物から、室町時代のものと思われる。

S T 130（図3・14，図版13）

調査区中央付近で検出した土壙墓である。当初、平面プランとブロック土が混じり合う覆土であったことから、掘立柱柱穴の可能性を考慮して掘り下げた経緯がある。平面形状は隅丸長方形で、断面は底部がややフラットな船底状を呈する。長さ1.25m、幅0.71m、深さ31cmを測る。主軸方位は、東へ 33.221° 振れる。上端内での面積は、 0.827m^2 である。切り合い関係から、S I 50に先行する。

S T 140（図3・14，図版14）

調査区中央やや北寄りで検出した土壙墓である。平面プランは隅丸方形で、底面はフラットに近い。その規模は、南北長1.06m、東西幅0.63m、深さはやや浅く17cmである。主軸方位は真北から 32.148° 東に振れる。上端内での面積は、 0.620m^2 である。

S T 150（図3・14，図版14）

調査区中央やや北寄りで検出した小形の土壙墓である。平面プランは隅丸方形を呈し、底面はフラットである。墓壙の規模は、南北長0.87m、東西幅0.55m、深さ24cmである。主軸方位は真北から 27.458° 東に振れている。上端内での面積は、 0.420m^2 である。

S T 160（図3・15，図版14・15）

調査区中央やや北寄りで検出した木棺墓である。平面プランは楕円形に近く、底面はほぼフラットである。墓壙の規模は、南北長1.26m、東西幅0.84m、深さ58cmである。木棺自体は残存しないが、土層観察から直径43～52cm程度の丸桶の棺であった可能性が考えられる。主軸方位は真北から 28.632° 東に振れている。上端内での面積は、 0.905m^2 である。

S T 170（図3・15，図版15）

調査区北辺中央付近で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はフラットに近い。墓壙の規模は、南北長1.15m、東西幅0.75m、深さ48cmである。土層観察では、木棺の痕跡はないものの、木蓋が落ち込んだような堆積状況が見られ、木蓋土壙墓であった可能性がある。主軸方位は真北から 35.513° 東に振れている。上端内での面積は、 0.775m^2 である。

S T 180（図3・16，図版15）

調査区北辺中央で検出した木棺墓である。平面プランは隅丸長方形に近く、底面は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長1.21m、東西幅0.75m、深さ36cmである。木棺自体は残存しないが、

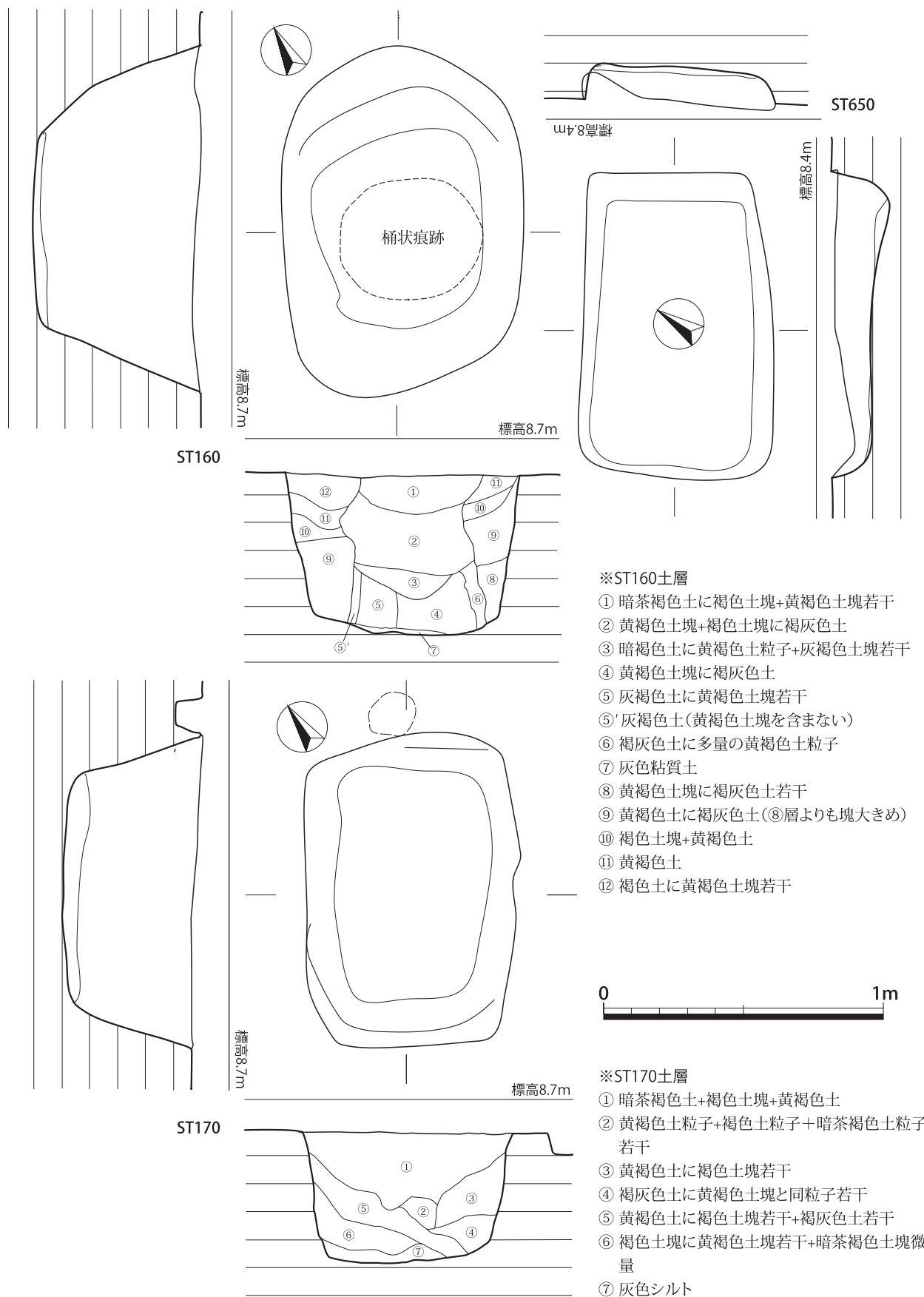


図15 S T 160・170・650平面・断面見通し・土層図 (1/20)

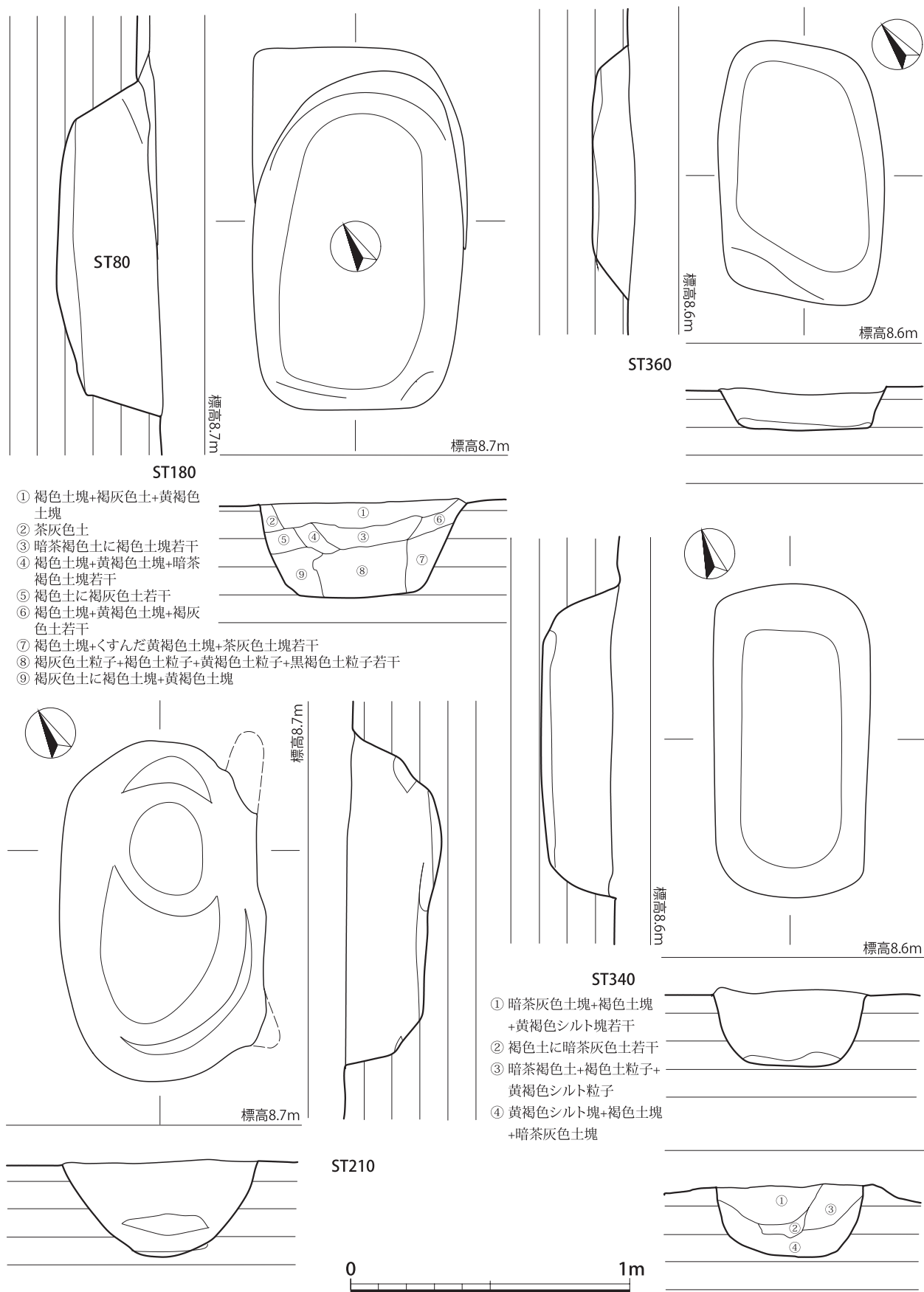


図16 S T180・210・340・360平面・断面見通し・土層図（1/20）

土層観察から幅29cm程度の木棺の存在が想定される。主軸方位は真北から29.892° 東に振れる。上端内での面積は、0.792m²である。

S T 210 (図3・16, 図版16)

調査区南西隅で検出した土壌墓である。平面プランは楕円形を呈し、底面は船底状となり、北側がやや窪んでいる。墓壙の規模は、南北長1.22m、東西幅0.74m、深さ34cmである。主軸方位は真北から29.818° 東に振れている。上端内での面積は、0.759m²である。

S T 310 (図3・17, 図版2)

調査区南東部で検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面は南へ深くなり階段状を呈する。墓壙の中央部は、深さ23cmでフラットな面となっており、あるいは本来の底面がここであり、それよりレベルが下がる南側には、別遺構が重複していた可能性も残す。墓壙の規模は、南北長1.22m、東西幅0.88m、深さ33cmである。主軸方位は真北から18.633° 東に振れる。上端内での面積は、約0.99m²である。

S T 320 (図3・17, 図版2)

調査区南東部で検出した土壌墓である。墓壙の南半部は、現代の掘り込みにより破壊されている。平面プランは隅丸長方形と思われ、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長1.04m以上、東西幅0.85m、深さ46cmである。主軸方位は真北から35.197° 東に振れている。上端内での推定面積は、約0.8m²である。

S T 340 (図3・16, 図版16)

調査区中央東側で検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長1.12m、東西幅0.525m、深さ24cmである。土層観察からは木棺の使用は確認できなかった。主軸方位は真北から19.065° 東に振れる。また、上端内での面積は、0.585m²である。

S T 350 (図3・14, 図版2)

調査区東半中央やや南寄りで検出した小形の土壌墓である。平面プランは隅丸方形で、断面形状は船底型である。その規模は、南北長0.94m、東西幅0.63m、深さは浅く14cmである。主軸方位は真北から47.121° 東に振れる。上端内での面積は、0.460m²である。

S T 360 (図3・16, 図版2)

調査区東辺中央付近で検出した小形の土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はフラットである。墓壙の規模は、南北長0.92m、東西幅0.59m、深さ14cmである。主軸方位は真北から37.991° 東に振れている。上端内での面積は、0.494m²である。

S T 370 (図3・18, 図版16・17)

調査区中央付近で検出した大形の土壌墓である。平面プランは隅丸方形で、底面はフラットである。その規模は、南北長1.48m、東西幅0.98m、深さは76cmである。土層観察から、褐色土・黄褐色土・暗褐灰色土などのブロック土が混じりあった状態で埋め戻されている状況が見られたが、

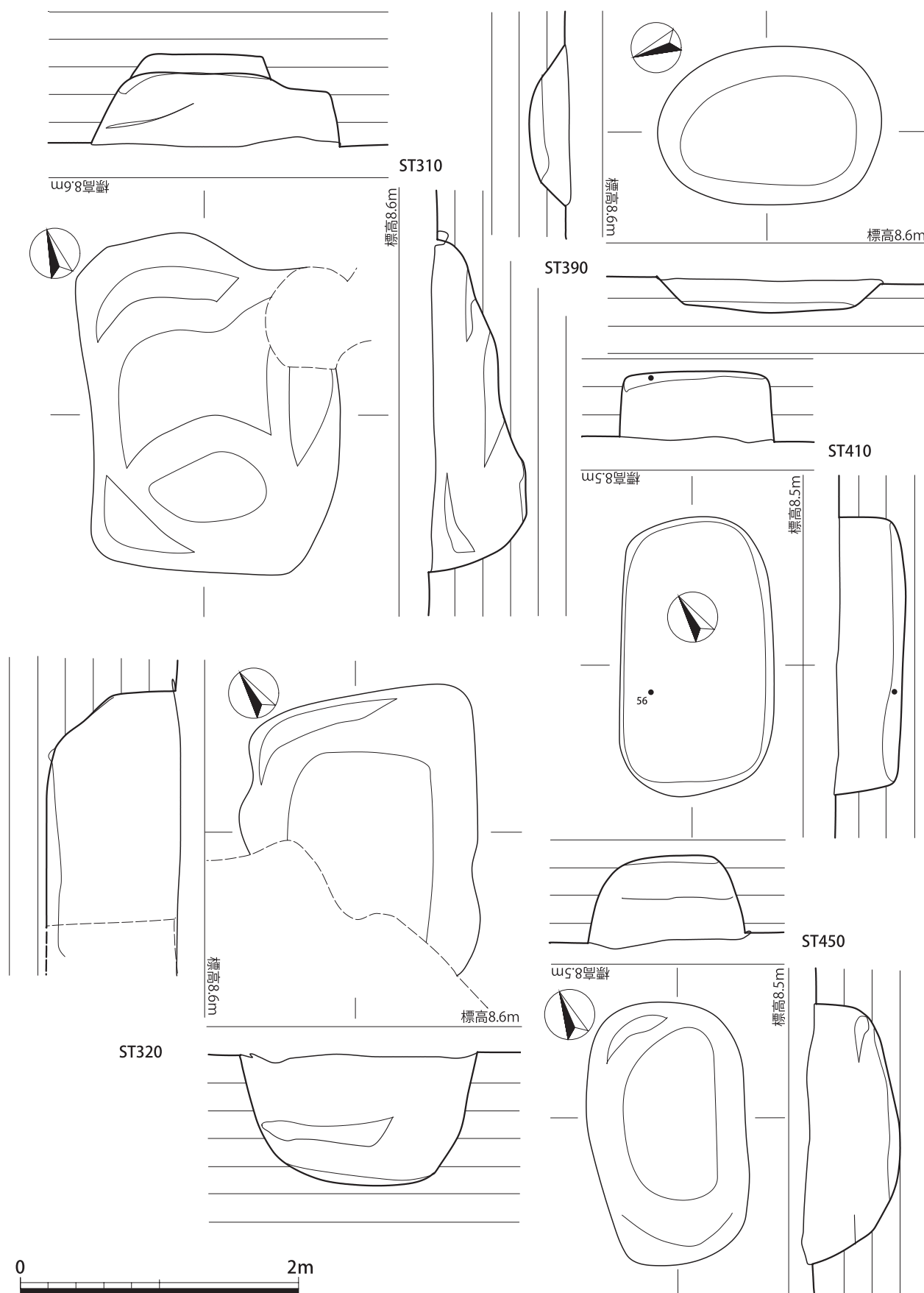


図17 S T 310・320・390・410・450平面・断面見通し図（1/20）

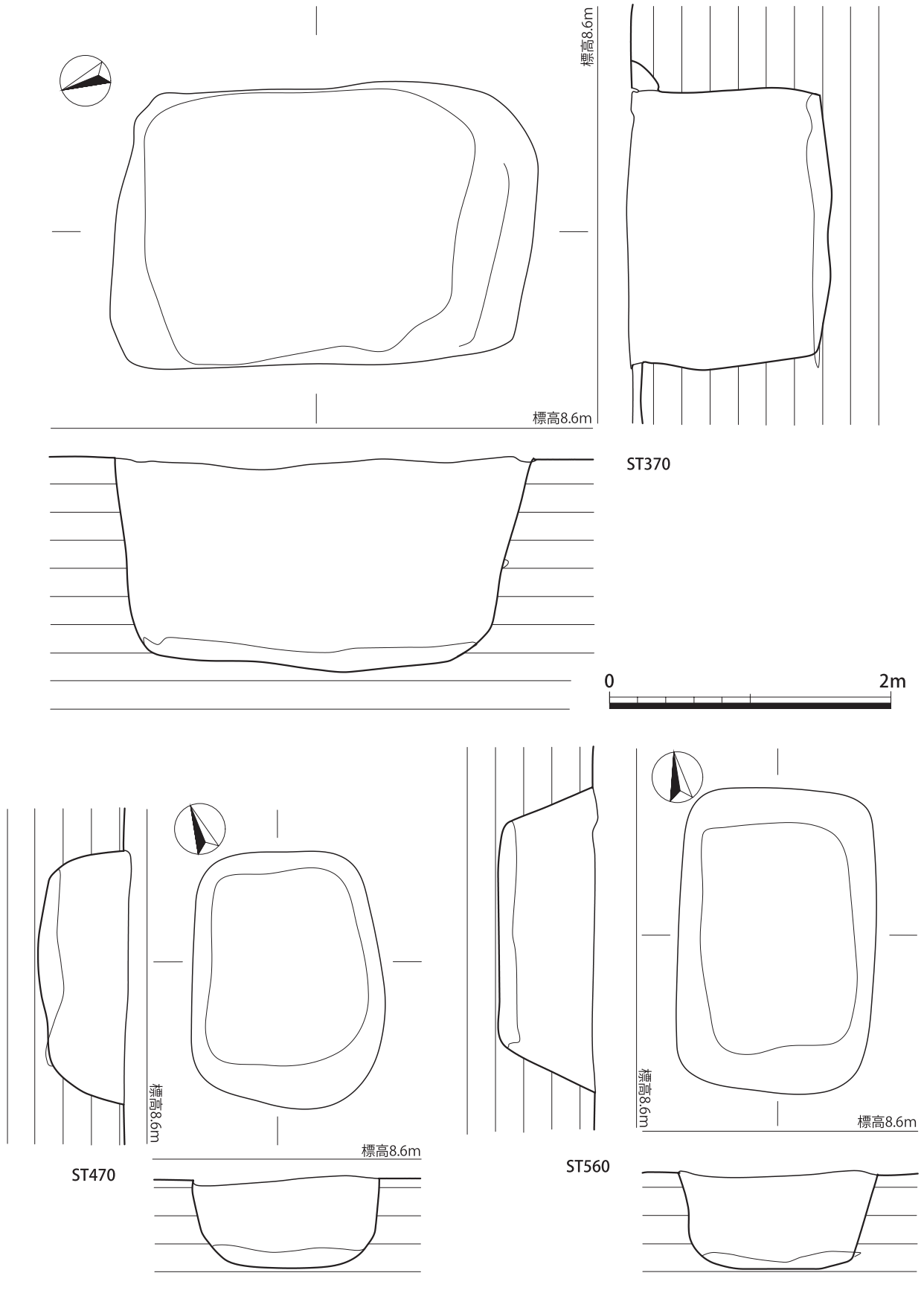


図18 S T 370・470・560平面・断面見通し・土層図 (1/20)

木棺などの痕跡は確認できなかった。主軸方位は真北から 22.554° 東に振れる。上端内での面積は、 1.395m^2 である。

ST390（図3・17，図版2）

調査区東壁際中央部で検出した小形の土壙墓である。平面プランは楕円形で、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長 0.79m 、東西幅 0.57m 、深さ 14cm である。主軸方位は真北から 21.938° 西に振れている。上端内での面積は、 0.378m^2 である。

ST410（図3・17・27，図版17）

調査区北東部で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形に近く、底面はほぼフラットである。規模は、長さ 1.0m 、幅 0.55m 、深さ 25cm を測る。墓壙内の南西側床面付近からは、副葬品と考えられる銅銭3枚が重なったさし銭の状態出土した。種類が判明する2枚は、北宋銭の皇宋通寶と、明銭の永樂通寶である。主軸方位は 34.099° 東に振れている。上端内での面積は、 0.494m^2 である。出土遺物から、室町時代のものと思われる。

ST420（図3・19，図版17）

調査区北東側で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形に近い形状で、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長 1.14m 、東西幅 0.59m 、深さ 45cm である。埋土中には、地山土である黄灰色シルトブロックが大量に混じる。主軸方位は真北から 18.464° 西に振れている。上端内での面積は、 0.703m^2 である。

ST430（図3・20，図版18）

調査区北東側で検出した土壙墓である。平面プランは楕円形に近い形状で、断面形状は船底状を呈する。ただし、底面は中央部付近が横に拡張しており、この部分の壁の立ち上がりは垂直に近くなる。墓壙の規模は、南北長 1.62m 、東西幅 0.76m 、深さ 54cm である。主軸方位は真北から 71.412° 西に振れている。上端内での面積は、 1.053m^2 である。

ST440（図3・19・27，図版18）

調査区中央東側で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はフラットである。北壁はややオーバーハング気味である。規模は、長さ 0.865m 、幅 0.52m 、深さ 22cm を測る。墓壙内からは、副葬品として土師器の坏2点と小皿1点出土した。図27-49の坏は、床面中央部付近に伏せられた状態で、同じく-48の坏は北東側から墓壙内に落ち込んだ状態で発見された。図27-49の小皿も同じく-49の北側に隣接して床面に伏せられた状態であったと思われるが、調査時の不注意から記録以前に取り上げられてしまった。なお、主軸方位は 14.652° 東に振れている。出土遺物から、室町時代のものと思われる。上端内での面積は、 0.422m^2 である。

ST450（図3・17・27，図版2）

調査区北辺東側で検出した土壙墓である。平面プランは楕円形に近く、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長 0.94m 、東西幅 0.56m 、深さ 35cm である。主軸方位は真北から 23.311° 東に振れている。上端内での面積は、 0.466m^2 である。埋土中より室町時代の土鍋片が出土してい

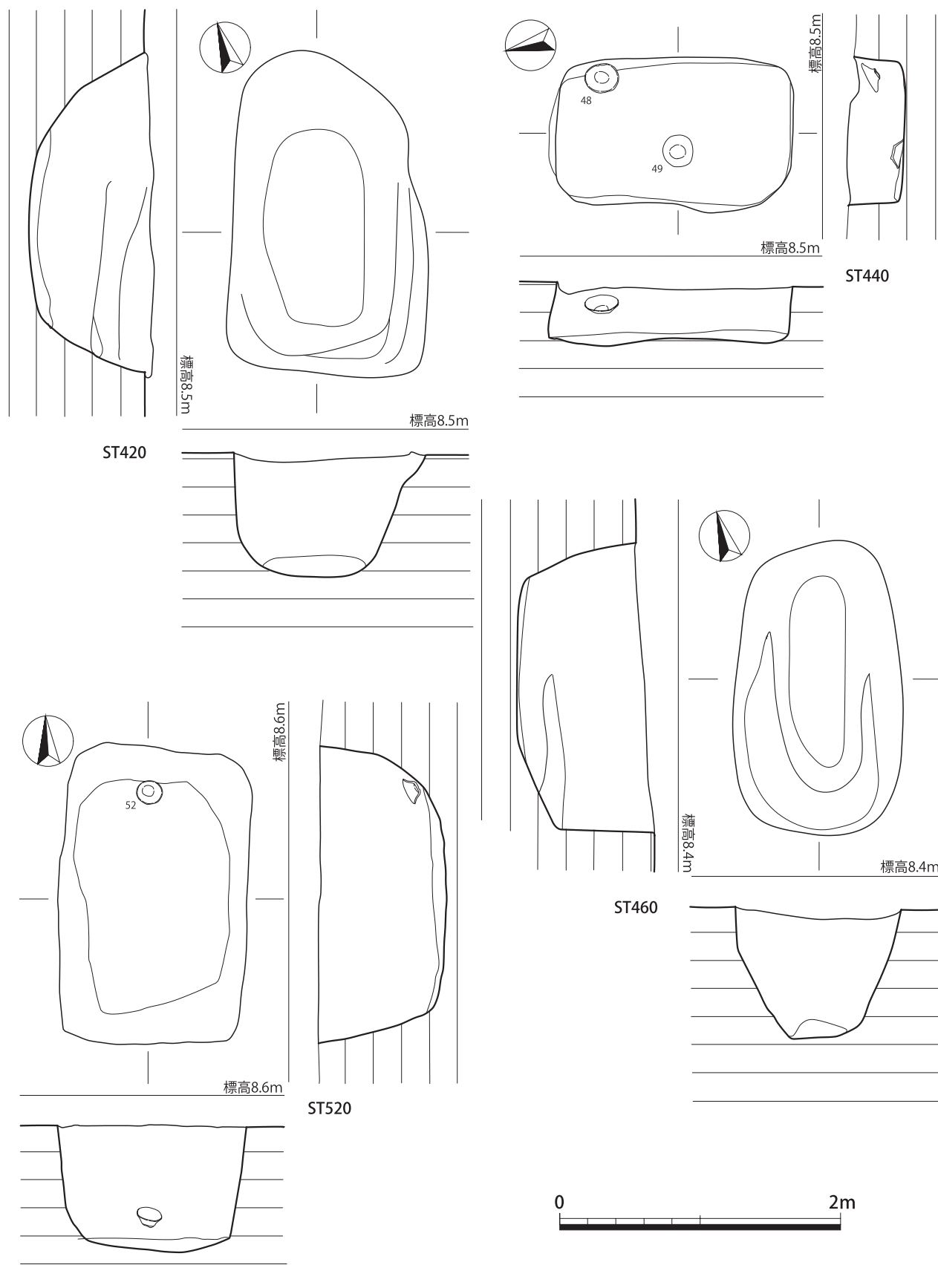


図19 S T 420・440・460・520平面・断面見通し図 (1/20)

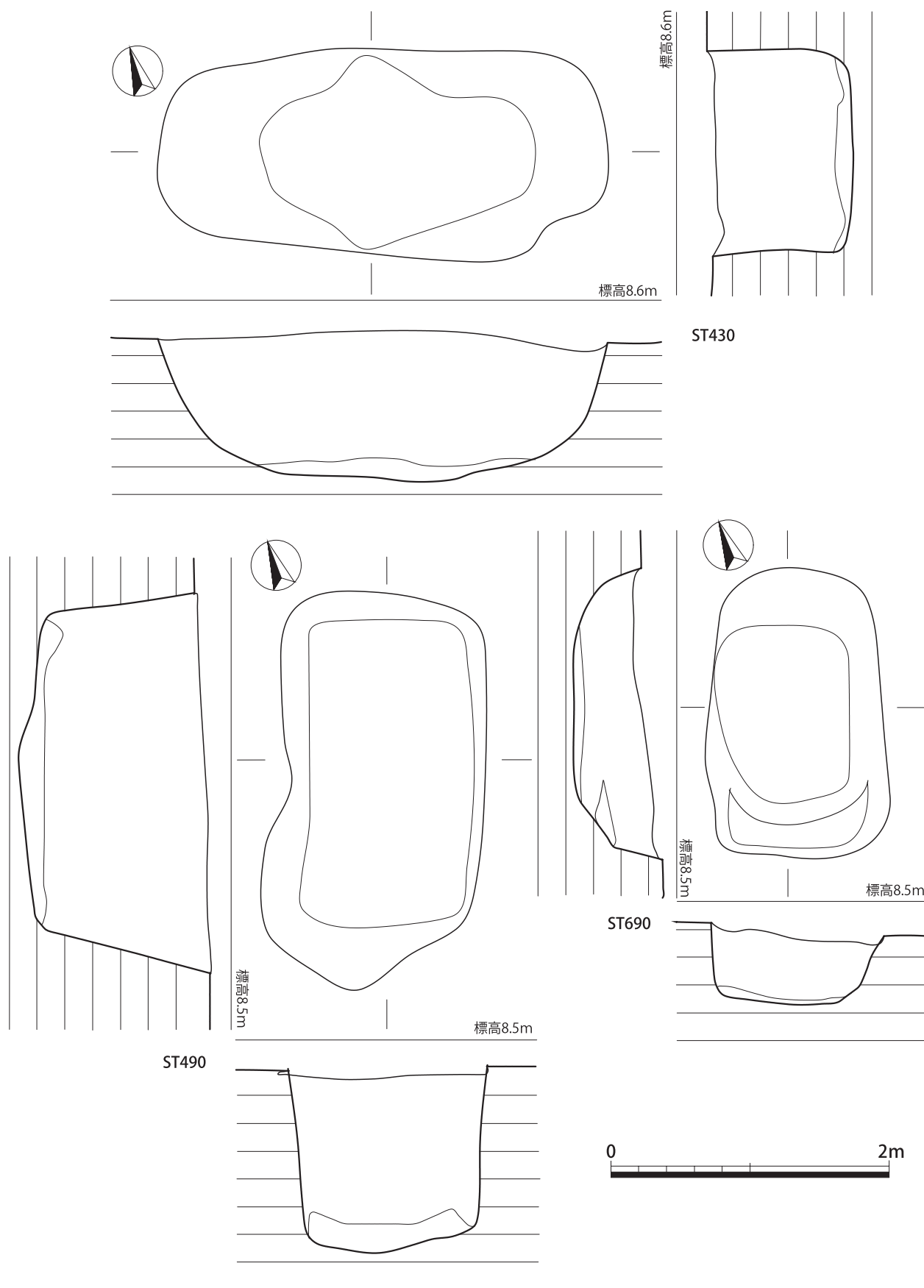


図20 S T 430・490・690平面・断面見通し図（1/20）

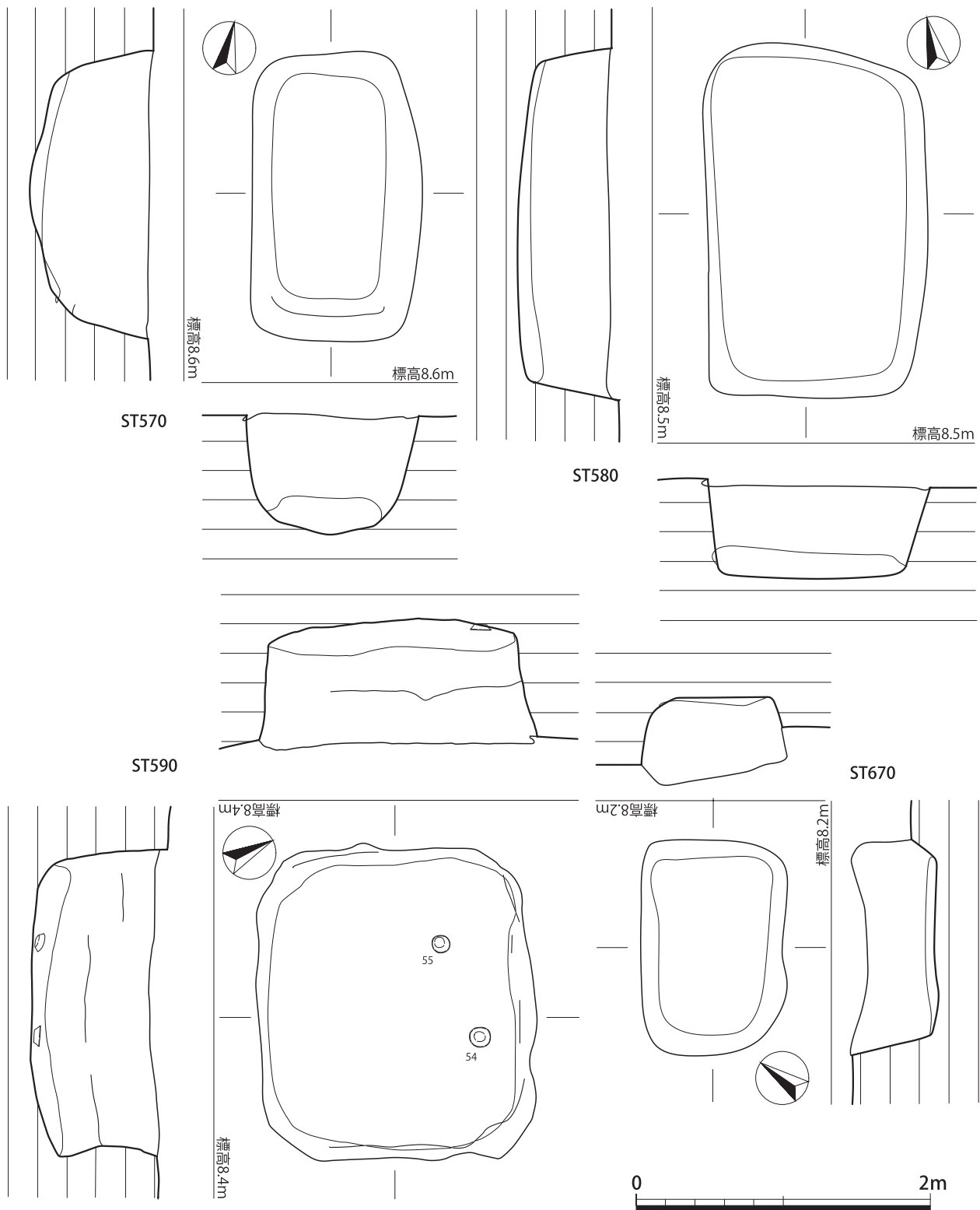


図21 S T 570・580・590・670平面・断面見通し図 (1/20)

る。切り合い関係から、S T 680の周溝より後出する。

S T 460（図3・19，図版2）

調査区北辺東側で検出した土壌墓である。平面プランは楕円形に近い形状であり、二段掘りで断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長1.05m、東西幅0.60m、深さ47cmである。主軸方位は真北から17.562° 東に振れている。上端内での面積は、0.543m²である。切り合い関係から、S T 680の周溝より後出する。

S T 470（図3・18，図版18）

調査区東辺北寄りで検出した小形の土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長0.92m、東西幅0.68m、深さ32cmである。主軸方位は真北から22.667° 東に振れている。上端内での面積は、0.551m²である。

S T 490（図3・20，図版19）

調査区北東隅部で検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はフラットに近い。墓壙の規模は、南北長1.43m、東西幅0.77m、深さ66cmである。埋土中には、地山土である黄灰色シルトブロックと褐灰色土が多く混入する。主軸方位は真北から20.706° 東に振れている。上端内での面積は、0.953m²である。

S T 520（図3・19・27，図版19）

調査区北東隅部で検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、断面形状は船底状を呈する。規模は、長さ1.07m、幅0.665m、深さ45cmを測る。墓壙内からは、副葬品として土師器の坏1点が出土した。坏は、北壁際中央部の床面からやや浮いた状況で検出された。なお、主軸方位は3.531° 東に振れている。上端内での面積は、0.676m²である。出土遺物から、室町時代のものと思われる。切り合い関係から、S K 530より後出する。

S T 560（図3・18・27，図版19）

調査区東壁際北寄りで検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はフラットに近い形状を呈する。墓壙の規模は、南北長1.08m、東西幅0.70m、深さ34cmである。覆土中からガラス小玉1点が出土した。主軸方位は真北から9.787° 東に振れている。上端内での面積は、0.712m²である。

S T 570（図3・21，図版20）

調査区東壁際北寄りで検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はフラットに近い形状を呈する。墓壙の規模は、南北長0.98m、東西幅0.58m、深さ42cmである。主軸方位は真北から11.068° 西に振れている。上端内での面積は、0.522m²である。

S T 580（図3・21，図版20）

調査区北東隅で検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形で、底面はほぼフラットである。墓壙の規模は、南北長1.2m、東西幅0.75m、深さ31cmである。主軸方位は真北から14.196° 東に振れている。上端内での面積は、0.843m²である。

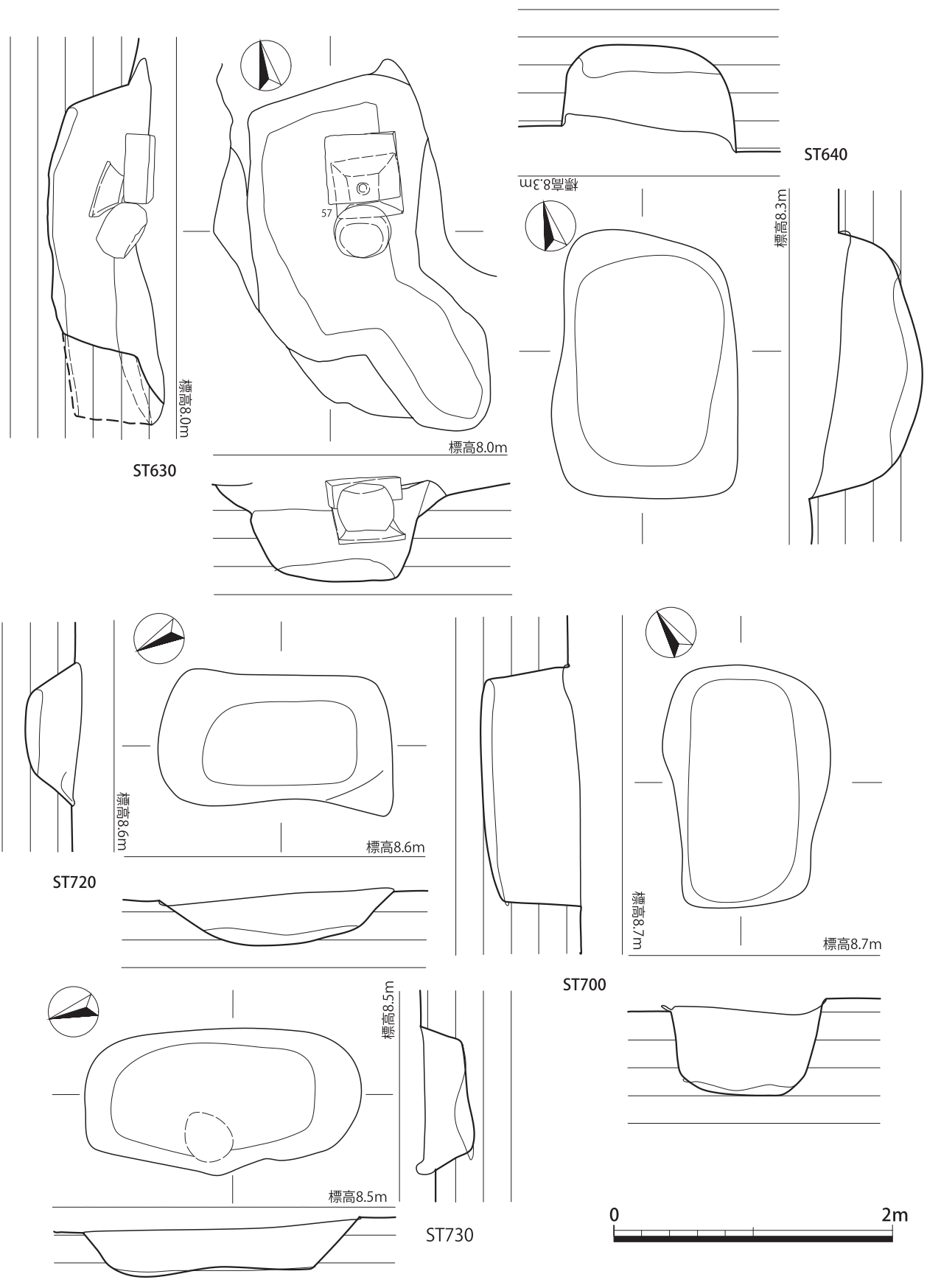


図22 S T 630・640・700・720・730平面・断面見通し図 (1/20)

S T 590（図3・21・27，図版20）

調査区東辺部中央東寄りで検出した土壙墓である。平面プランは隅丸方形に近く、底面はやや中央部が窪む船底状を成す。壁面は垂直か、やや開いた形状だが、東壁はオーバーハング気味である。墓壙の規模は、南北長0.94m、東西幅1.05m、深さ42cmである。床面北側で副葬品と考えられる土師器小皿が2点出土した。主軸方位は真北から28.342° 東に振れている。上端内での面積は、0.928 m²である。

S T 630（図3・22・27，図版21）

調査区東辺部中央付近で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形に近く、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長0.96m、東西幅0.69m、深さ37cmである。墓壙内東壁に沿って、五輪塔の地輪と火輪が逆さまに南北に並べて置かれ、地輪下部からは水輪が発見された。墓壙の南東角には張り出しが見られるが、改葬坑の可能性が考えられる。改葬時に土壙墓上部に建立されていた五輪塔を埋納したものであろうか。墓壙の主軸方位は真北から12.234° 東に振れている。上端内での推定面積は、0.61m²である。S T 680の周溝と重複するが、同遺構下で確認したことから先行する。

S T 640（図3・22，図版2）

調査区北辺中央東寄りで検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長0.96m、東西幅0.66m、深さ36cmである。主軸方位は真北から15.138° 東に振れている。切り合い関係から、S T 680の周溝より後出する。上端内での面積は、0.569m²である。

S T 650（図3・15，図版2）

調査区北辺中央東寄りで検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、底面はフラットである。墓壙の規模は、南北長1.1m、東西幅0.68m、深さ18cmである。主軸方位は真北から57.751° 東に振れている。上端内での面積は、0.709m²である。切り合い関係から、S T 680の周溝より後出する。

S T 670（図3・19，図版2）

調査区北辺東側で検出した小形の土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、底面はほぼフラットである。墓壙の規模は、南北長0.72m、東西幅0.5m、深さ28cmである。主軸方位は真北から55.721° 東に振れている。上端内での面積は、0.334m²である。S T 680の周溝と重複するが、同遺構下で確認したことから先行する。

S T 680（図3・23，図版21）

調査区北壁やや東寄りで検出した円形周溝墓である。全体を検出したわけではなく、北半分は調査区外へ延びる。主体部は土壙墓で、平面プランは楕円形に近く、断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、東西幅0.62m、深さ0.63mである。主軸方位は真北から9.385° 東に振れている。周溝部分は、直径約7.5mで、溝は幅1.4～2.0m、深さは8～25cmと幅がある。ただし、二段掘りの

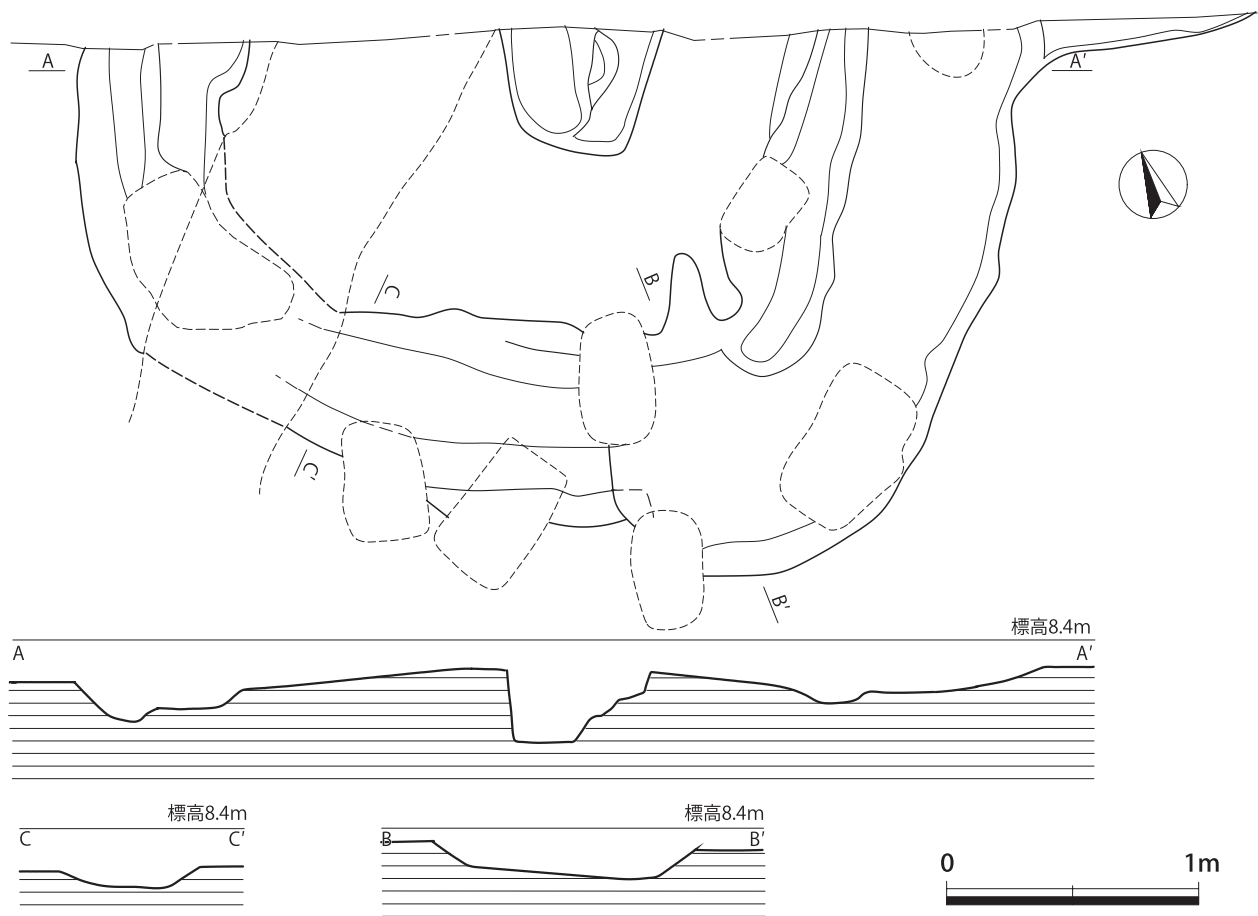


図23 S T 680平面・断面図 (1/60)

形状が確認できる箇所があり、掘り直しの可能性を考慮する必要がある。覆土中には小礫が多く含まれているが、これは墳墓内に敷かれていたものかもしれない。周溝内からの出土遺物には、糸切り底の土師器片・土鍋片などのほか、瓦器・白磁・青磁・染付の細片がある。

S T 690 (図3・20, 図版2)

調査区北辺中央東寄りで検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、二段掘りで断面形状は船底状を呈する。墓壙の規模は、南北長1.04m、東西幅0.64m、深さ30cmである。主軸方位は真北から22.797° 東に振れている。上端内での面積は、0.597㎡である。切り合い関係から、SD40より後出する。

S T 700 (図3・22, 図版2)

調査区北辺中央東寄りで検出した土壌墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、底面はフラットに近い。墓壙の規模は、南北長0.87m、東西幅0.6m、深さ36cmである。主軸方位は真北から34.51° 東に振れている。上端内での面積は、0.433㎡である。

S T 720 (図3・22, 図版2)

調査区南東部で検出した小形の土壌墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、底面は船底状を

呈する。墓壇の規模は、南北長0.84m、東西幅0.49m、深さ18cmである。主軸方位は真北から28.915° 東に振れている。上端内での面積は、0.374m²である。

S T 730（図3・22，図版2）

調査区南東隅部で検出した土壇墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、底面はほぼフラットである。墓壇の規模は、南北長0.99m、東西幅0.5m、深さ20cmである。主軸方位は真北から17.528° 東に振れている。上端内での面積は、0.430m²である。

Ⅲ-4) 出土遺物

調査面積が2,322m²と広く遺構密度が高い中、遺物は比較的出土量が少なく、パンコンテナー10箱程度であった。出土遺物には、弥生土器・石器、土師器・須恵器・石製品・ガラス製品・銭貨などがあり、時期別には、弥生時代、古墳時代、奈良時代、室町時代にまたがっている。

a. 竪穴住居（図24・25）

S I 10 掲載した土器は全て土師器である。1はp 1出土の高坏の坏部片で、体部外面に段があり、口縁に向かってやや外反する。外面の調整はハケ目の上からナデられており、内面には点々と小さな器面剥離がある。口径は18.0cmで、胎土には2mm大以下の礫や角閃石・雲母が混じる。

2～4は住居跡南東隅の床面から出土した。2・3は小型丸底壺で、口径よりも胴径の方が大きい。2の胎土には角閃石や赤色粒子が混じり、色調は橙～明赤褐色で焼成も良好である。口径7.1cm、胴径8.5cm、器高は7.0cmである。3はにぶい黄橙～にぶい橙の色調で、口径7.7cm、胴径8.55cm、器高8.8cmを測る。4は鉢で、体部外面は縦ハケ、内面上部は横ハケ、同じく下半部は横ケズリ、内底部はオサエで調整する。胎土には1mm大以下の礫、角閃石若干が含まれる。5・6は手づくね土器である。前者の胎土は精良で焼成もよく、口径4.0cm、底径2.0cm、高さ2.7cmを測る。後者の胎土には1mm大の礫と雲母が若干混じる。こちらの口径は3.9cm、底径3.1cm、器高3.5cmである。7・8は甕である。7は、口縁部が外側に強く外反するもので、体部外面は斜め＋横ハケ、同じく内面は縦方向の荒いケズリで仕上げる。体部外面の下半部には煤が付着しており、実際に使用されたことが判る。口径は14.5cm、胴径17.0cmを測る。8は外反する口縁と球状の胴部を有する。体部外面は不定方向のハケ目、同内面には横方向のケズリが確認でき、外面には煤が付着する。口径は16.9cm、胴径24.0cmを測る。なお、5～8は①層中からの出土である。

S I 20 9～12・14は土師器で、13は滑石製品である。9は新段階の屋内土坑中から出土した鉢で、ナデで整形した後、外底部を手持ちヘラケズリする。胎土は比較的精良で、口径14.6cm、器高は4.9cmである。10は小形の壺で、口縁部を欠損しているが、頸がやや長いタイプであろう。調整は内外ともにナデ、内底部をオサエ＋ナデで仕上げる。11と12は手づくね土器である。前者は口径4.3cm、器高2.7cmを測る。後者は口縁部を欠損し、外面が大きく剥離している。体部には外方向から穿孔された円形の透かし穴が四方向にあり、かつ2穴の中間位置にも楕円形に近い縦長の透かし穴1ヶ所、計5ヶ所の透かし穴が認められる。胎土には角閃石や雲母が若干量混入する。13

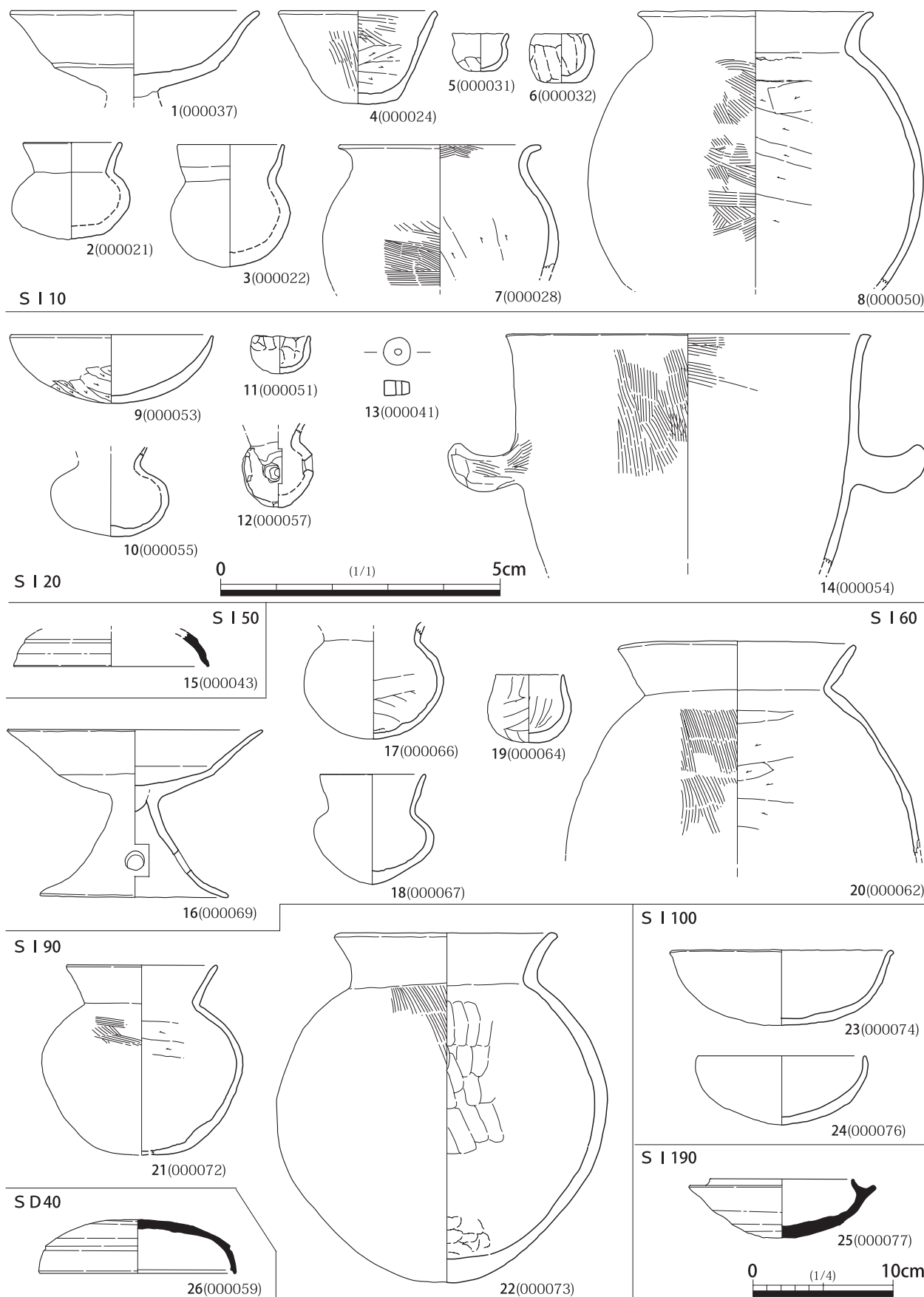


図24 S I 10・20・50・60・90・100・190、S D 40出土遺物実測図 (1/1・1/4)

は、屋内土坑から出土した滑石製の小玉で、直径4.6mm、孔径1.0mm、厚さ2～3mmである。14は甑と考えられるものである。調整は外面が縦ハケで、内面上部が横ハケであるが、内面下部については器面が荒れ不明瞭である。口径は25.0cm程度に復元できる。

S I 50 15は須恵器坏蓋の口縁部片である。外面には段の痕跡が残り、口縁端部の内面側にも小さな段が比較的明瞭である。内外ともに回転ナデで仕上げられ、復元口径は14.0cmである。胎土には3mm大以下の石英と黒色粒子が若干混入する。

S I 60 掲載した土器は全て土師器である。16は東壁際中央南寄りの床面から出土した高坏で、坏部は体部中程でくの字に折れ、口縁部は直線的に延びる。脚部は大きく開き、2ヶ所に穿孔する。坏部と脚部の接合部には粘土を充填している。器面が荒れているため調整は不明瞭だが、ハケ目後、ナデているようである。胎土には角閃石若干を含み、色調は橙色と焼成もよい。口径は18.4cm、底径13.5cm、器高12.0cmを測る。17は西壁際北半部の床面から検出した小型丸底壺である。口縁部を欠いているが、胴部径の方が大きいタイプと思われる。内外面ともにナデで仕上げられるが、内底部付近は特に強くナデる。胎土には角閃石のほか、2mm大以下の石英が多量に含まれる。18は、北壁際中央東寄りの床面から出土した小型丸底壺である。内底部はオサエ、その他はナデで仕上げられる。胎土には2mm大以下の礫を含み、口径7.5cm、胴径8.1cm、器高7.9cmを測る。19は手づくね土器である。2mm大の礫が胎土に含まれる。口径・器高ともに4.9cmを測る。20は口縁部がくの字に折れる甕である。体部外面は縦ハケ、同内部は横方向のケズリで整形する。胎土には5mm大以下の礫が大量に含まれる。色調は橙色で焼成は良好である。

S I 90 21・22ともに土師器の甕である。21は口縁部がくの字に折れる小形のもので、外面下半には煤が付着する。調整は外面上半を横ハケ、内面上半部を荒い横方向のケズリで仕上げる。胎土には、若干量の角閃石に加えて、2mm大以下の礫を多量に含む。口径は10.8cm、胴径14.8cm、器高13.6cmである。22は、器壁が8～10mmほどと厚みがある甕である。外面上部は斜め方向のハケ目、内面は強い縦方向のナデ、内底部はオサエで仕上げる。2mm大以下の礫を多量に含む、焼成も良好で色調は橙色である。口径は16.0cm、胴径23.2cm、器高25.0cmを測る。

S I 100 23は屋内土坑から出土した土師器の鉢である。器面が荒れており調整は不明だが、胎土は精良で、焼成もよく発色は橙色である。口径は16.0cm、器高5.4cmである。24は土師器の坏で、ナデ調整で仕上げられるが、外底部は手持ちヘラケズリの可能性がある。胎土には5mm大以下の石英を中心とした礫を含むなど荒い印象だが、焼成は良好で、色調は橙色である。法量は、口径12.4cm、器高5.9cmである。

S I 190 25は受けがやや低くなった須恵器の坏身である。調整は回転ナデを基本に、内底部はその後横ナデ、外底部は回転ヘラケズリを施す。胎土には2mm大以下の礫を含む。色調は灰色で、直径13.4cm、器高4.2cmを測る。

S I 400 掲載したものは全て土師器である。27は高坏で、坏部内面中程には段があり、脚部は大きく外側に開く。器面が荒れているため調整は不明瞭だが、坏部と脚部を接合する際に粘土を

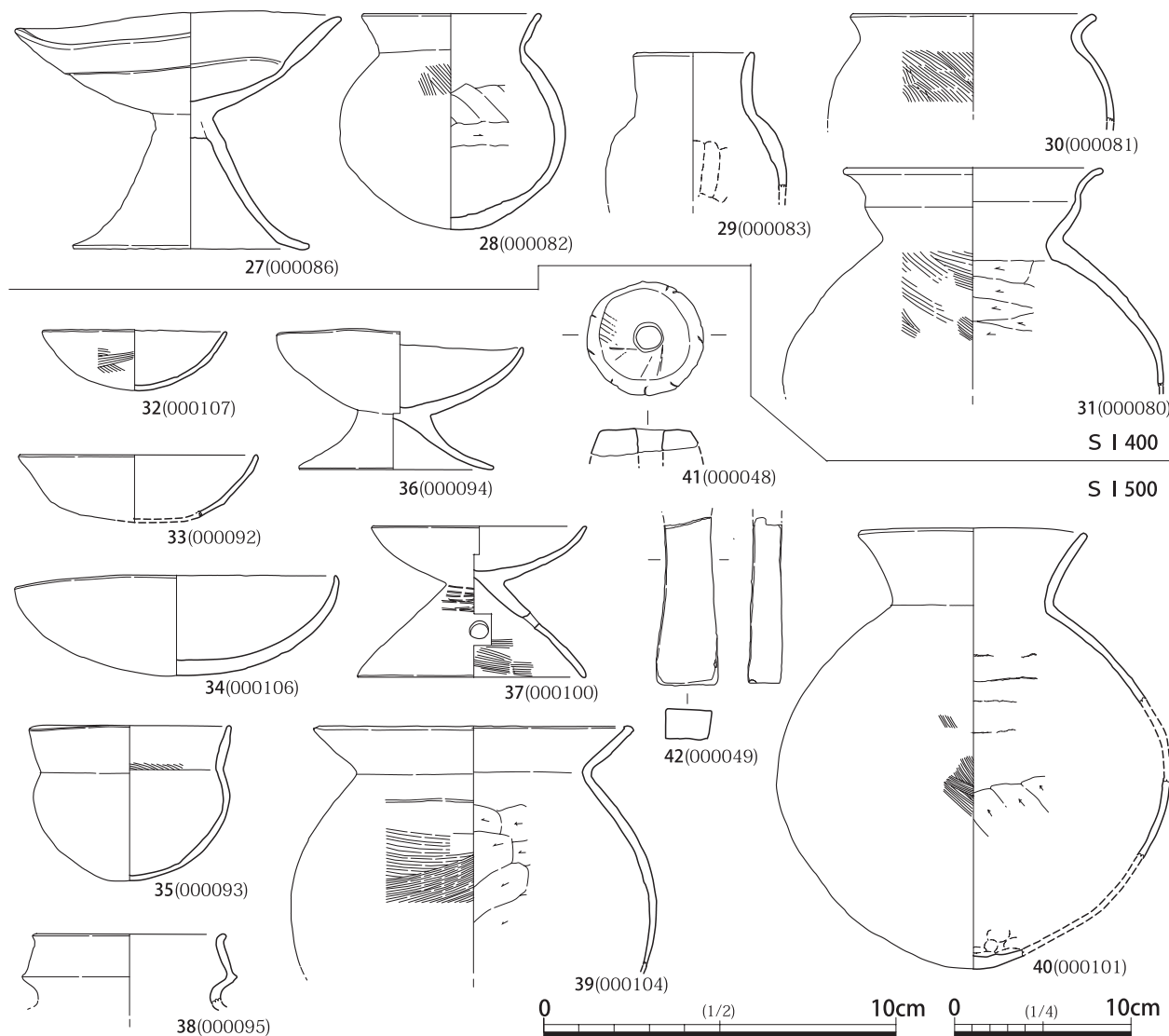


図25 S I 400・500出土遺物実測図 (1/2・1/4)

充填している。法量は口径18.6cm、底径13.4cm、器高13.4cmである。**28**は小形の甕である。調整は、体部外面を斜め方向のハケ目で、内面上半部にはナデとオサエ、同下半部にケズリを施す。胎土には2mm大以下の礫を含む。法量は、口径10.2cm、胴径12.8cm、器高12.3cmである。**29**は頸が直立する小形の壺である。体部外面にはハケ目の後ナデ、内面はナデとオサエで調整する。胎土には雲母を含む。法量は、口径6.9cm、胴径10.3cmである。**30**は緩やかに外反する甕の口縁部片である。体部外面は斜め方向のハケ目、内面は縦ナデを施す。体部外面には煤が付着する。胎土には1mm大以下の礫を含み、焼成は良好で色調が橙色を呈する。口径は14.0cmを測る。**31**は退化した二重口縁を有する甕である。体部外面の調整は斜めハケ、内面は横方向にケズリを施す。胎土には1mm大以下の礫を含み、色調は橙色で焼成も良好である。口径は14.8cmである。

S I 500 **32~40**までは土師器である。**32**は屋内土坑から出土した小形の鉢である。内面の調整は不明だが、外面はハケ目で仕上げる。胎土は角閃石を若干量含む。法量は、口径5.5cm、器高

3.45cmである。**33**も鉢で、器面が荒れ調整は不明である。胎土には3mm大の礫を多量に含むが、焼成は良好で橙色の色調を呈する。口径は13.6cm、器高は3.8cmを測る。**34**は下層から出土したやや浅い鉢である。これも器面調整は不明である。胎土には、角閃石若干だけでなく3mm大以下の礫が多量に含まれる。口径は18.4cm、器高は5.7cmを測る。**35**は下層出土の小型丸底壺である。調整は不明瞭であるが、体部外面はタタキ後ナデ、内面はケズリを施すかと思われる。2mm大以下の石英を胎土に含む。法量は口径11.5cm、器高8.8cmである。**38**は下層出土の二重口縁壺の口縁部片である。胎土には1mm以下の礫や雲母若干を含み、法量は口径11.0cmに復元できた。**36**は下層出土の脚付鉢である。器面が荒れているため、内面はナデと思われるが、外面の調整は不明である。口径は14.0cm、底径11.1cm、器高8.0cmを測る。**37**は下層出土の器台である。浅い坏部の調整は不明瞭だが、ミガキによるものだろう。大きくハの字に開く脚部外面は横方向のミガキ、内面には横方向のハケ目を施す。また脚部中程には四方向から穿孔を施す。胎土は概ね精良で、焼成は良好である。法量は、口径12.2cm、底径13.2cm、器高8.6cmである。**39**は下層から出土した布留系の甕である。口縁部はくの字形に開き、その端部内側はわずかに摘みだす。体部外面には横ハケを施し、肩部に一条の沈線をめぐらす。体部内面は横方向にケズリを行う。また体部外面には煤が付着している。胎土には、雲母と角閃石若干量のほか、5mm大以下の礫が多量に含まれる。法量は口径18.2cm、胴径20.8cmである。**40**は下層出土の布留系の壺である。体部外面は被熱のため器面が荒れているが、ハケ目調整である。肩部の内面には粘土紐の接合痕跡が明瞭であり、体部内面下半部では斜め方向のケズリ、底部には指頭圧痕が認められる。胎土には、2mm大以下の礫が大量に混じる。法量は、口径13.1cm、胴径22.4cm、器高25.0cmである。**41**は、上層から出土した紡錘車の紡輪部分である。材質は滑石と思われる柔らかい石材で、色調は灰白色、表面には放射状の線刻、側面にも不等間隔で刻みが認められる。中心部よりややずらして穿孔されている。法量は、直径3.35cm、孔の直径7mmである。**42**は最下層から出土した粘板岩製の砥石である。長さ9.5cm以上、幅3.5cm、厚さ1.9cmで、四面全てを使用している。

b. 溝（図24）

S D 40 **26**は底面付近から出土した須恵器の坏蓋である。体部外面には、わずかに突帯状の摘みだしとその直下に沈線がめぐる。口縁端部内側は明瞭に段が付き、内側へ摘み出す。天井部は左回りの回転ヘラケズリを施している。胎土には5mm大以下の礫が多量に含まれる。焼成は良好で、内外面ともに灰色の色調を呈する。法量は、口径14.2cm、器高3.85cmである。

c. 墳墓（図26・27）

S T 220 **43**は**44**の壺棺の蓋に使用された夜臼式の深鉢である。壺棺内部から出土した。口縁端部と胴部上位の屈曲部にそれぞれ刻目突帯文を施す。接合は内傾接合である。器面の調整は、体部外面の二条の突帯文間に横方向の条痕が、内面上部には横方向の条痕とナデ、同下部にはナデの痕跡が残る。外面は二段目の突帯下部に煤が付着しており、日常生活に使用したものの転用であることが判る。色調は、口縁内側が橙色、その他は黄褐色で、胎土には、角閃石や礫が多く含まれる。



図26 S T 220出土遺物実測図 (1/4)

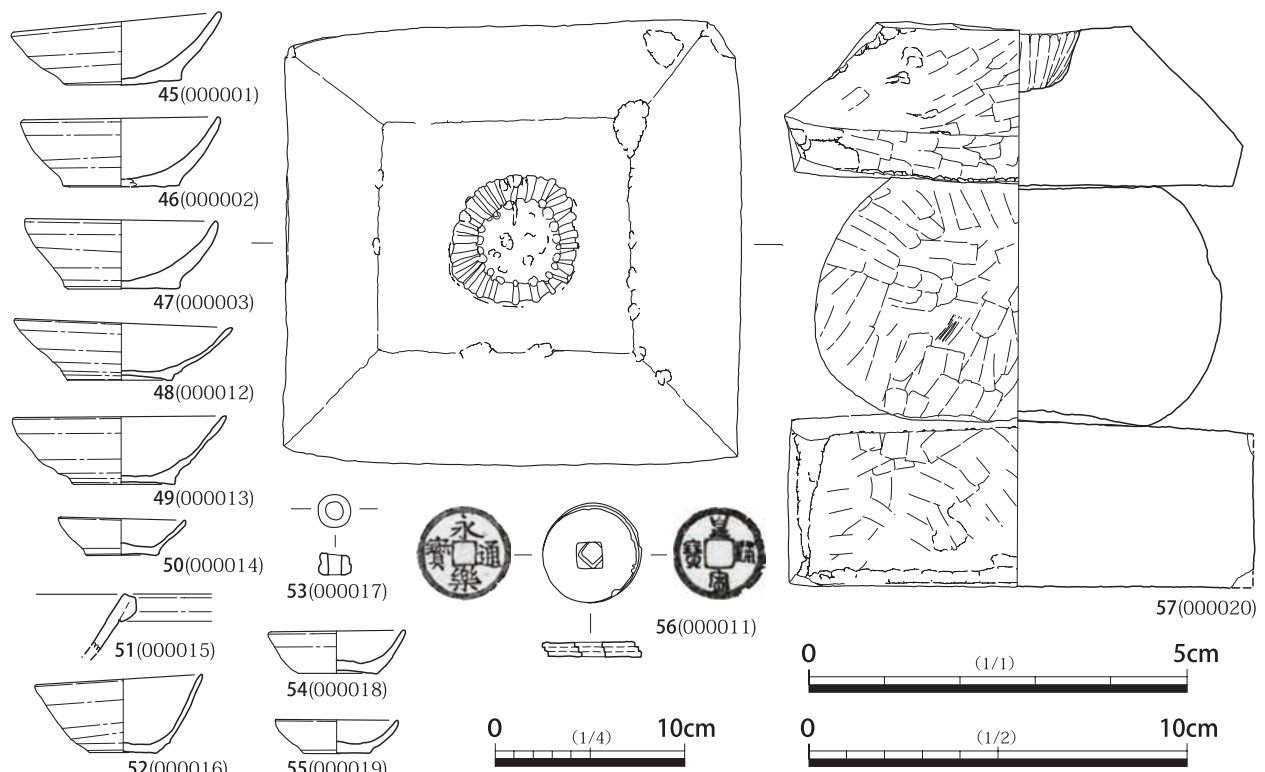


図27 S T 80・410・440・450・520・560・590・630出土遺物実測図（1/1・1/2・1/4）

口径は22.5cmである。44は棺として使用された大形の壺である。外面と内面頸部に赤色顔料が塗布されており、外面には黒斑が見られる。壺のスタイルは、肩が張り口縁が内傾気味にすばまり、口縁端部には粘土帯が貼り付けられて玉縁状にやや肥大する。底部は平らではなく凸レンズ状にややふくらむ。外面の器面調整は、口縁部から頸部にかけては細かな横方向のミガキ、肩部ではやや荒くなるものの、ミガキの方向は横が基本である。体部下半になると縦方向にミガキを施すようになるが、底部付近では不明瞭となる。内面では、口縁部では横方向のミガキだが、肩部より下部では条痕をナデ消したような痕があり、赤色顔料も塗布されない。胎土は精良で、1mm程度の礫を若干量含む。土圧のため歪みがあるが、法量は復元口径19.0cm、底径8.8cm、器高は68.5cmである。

S T 80 45～47は副葬品の土師器坏で、全て回転糸切り底である。水引き整形され、歪みは大きい。45は口径11.2cm、底径6.2cm、器高は2.8～3.9cm。46は口径10.4～10.6cm、底径6.0～6.2cm、器高3.7cm。47は口径10.2～10.6cm、底径6.1～6.5cm、器高3.6～3.7cmである。

S T 410 56は副葬品の銅銭である。3枚が重なり、挟まれた中央を除く二枚の種類が判明している。1枚は明銭の永楽通寶、もう1枚は北宋銭の皇宋通寶でこちらは篆書体である。

S T 440 48・49は副葬品の土師器坏、50は小皿で、全て回転糸切り底であり、器形に歪みも大きい。48は口径11.2cm～11.6cm、底径5.4～5.6cm、器高は2.5～3.2cm。49は口径10.2～10.5cm、底径5.4～5.6cm、器高3.1～3.8cm。50は口径6.8cm、底径3.8cm、器高1.8～2.0cmである。

S T 450 51は覆土中から出土した土鍋片である。玉縁状の口縁がめぐるタイプで、胎土には

1 mm程度の礫、赤色粒子、金雲母を含む。

S T 520 52は副葬品の土師器坏である。水引き整形され底部は、回転糸切り調整である。法量は、口径8.6cm、底径3.6cm、器高は3.5～4.2cmである。胎土は精良で赤色粒子・金雲母を含む。

S T 560 53はガラス製の小玉である。色調は水色で、法量は直径4～4.5mm、厚み2～3mm、孔径2mmである。覆土中から1点のみの出土であり、副葬品であるかどうかの判断は難しい。

S T 590 54・55は副葬品の小皿で、全て回転糸切り底である。水引き成形のため歪みが大きい。53は口径7.3cm、底径4.5cm、器高は2.2cmと推定する。55は口径6.6cm、底径3.6cm、器高1.8cmである。いずれも胎土は精良であるが、金雲母を含む。

S T 630 57は五輪塔である。ソケット式にはめ込む空輪のみが欠けている。現状での高さは29.8cm、最下部の地輪の幅は24.7cmである。材質は凝灰岩で、コンパクトではあるが、丁寧に製作されている印象がある。表面には幅1～1.3cm程の細かなノミの痕跡をたどることができ、屋根状の風輪の軒部分は、両端部で微妙な反りを持つなど、熟練した職人の技術を感じることができる。

IV. 総 括

以下では、遺構間の切り合い関係や出土遺物などのデータから時期区分し、今回検出された遺構・遺物を中心に時期別に概観していきたい。

弥生時代 調査区の南西側で検出したS T 220が唯一の遺構である。墓壇内からは、夜臼Ⅱ式の深鉢を蓋に、丹塗り研磨された大形壺を棺とした壺棺が出土した。当該期の遺跡は少ないが、対象を広川下流域に広げると、いくつかの例を挙げることができる。例えば、大善寺町の古賀遺跡では複数のピットから、また荒木町の宮原遺跡の溝内から刻目突帯文土器が出土している。これは、当地方での弥生文化の開始が早期段階に遡る可能性を示している。筑後川下流から中流域にかけては、朝鮮系無文土器が多く出土する地域である。このことから、当地方における半島との交流は、前期末以降も引き続き盛んであったと思われる。因みに中期～後期になると、広川流域では川沿い2～3km間隔で青銅武器の埋納遺構が点在するようになる。埋納された青銅器の合計数は、銅剣4、銅矛33、銅戈2にのぼり、青銅製武器形祭器としては全国でも有数の集中度である。この段階に至って、広川流域の弥生社会は近隣でも、重要な地位を占めるようになっていく。

古墳時代 竪穴住居や溝、土坑の一部がこの時期に該当する。最も先行するのは、前期前半（3世紀後半～4世紀初頭）のS I 500である。覆土の類似性や切り合い関係から、畝状遺構S X 800も、この時期に該当するかもしれない。次に中期前葉（4世紀末～5世紀前半）のS I 10があり、続いて中期中葉のS I 20・60・90・400やS K 230がある。中でもS I 20からは、カマドと甗が出土し、当地方におけるその導入が5世紀前半であったことが判明した。また、中期の住居は、床面積が35㎡を超える大形と、10㎡ほどの小形の2種類に分かれるようである。後期後半（6世紀後

半）では、S I 50・100・110・190・200・550、S D 40がある。柱は4本柱のものも認められるが、中期以来、不明確なものが多い。カマドは西側に設置するものが殆どだが、S I 190のように煙出しとともに南側に設置する例もある。以上のように、竪穴住居群は空白期間があるものの概ね古墳時代前期～後期にかけて継続したと考えてよいだろう。しかし、南西側の第2次調査地では、後期後半の竪穴住居・掘立柱建物が中心で、東側の第1次調査地からは終末期（7世紀後半）の掘立柱建物群が検出されている。このように、検出される遺構の年代が調査地ごとに異なる傾向を示すことから、集落域は時期によって台地上を移動しながら営まれていたと考えられる。

奈良時代 この時期には土坑 S K 510のみで、詳細は不明である。

室町時代 今回、円形周溝墓をはじめとして、合計41基にのぼる多数の中世墓を発見した。この種の遺構は、周辺の調査では全く検出されていなかった。墓壇の大きさは、概ね大小2種類に分けることができ、これが大人と子供に対応する可能性もあろう。一方、S T 630の墓壇内からは五輪塔が出土した。出土状況から、改葬時に埋納したと思われるものである。切り合いや位置関係から考慮すると、改葬先は円形周溝墓 S T 680の可能性もある。墓は、直列に配置されたり、並列したりと比較的整然と配置されており、かつ円形周溝墓以外の墓同士が切り合わないことから、視覚的な目標物が存在したものと思われる。すなわち他の墓の上部にも、本来は五輪塔が建立され、それらが立ち並ぶ景観を想像することができるだろう。なお、分布は調査区内でも東側に偏ることから、東方側約50mに位置する第1次調査地にかからない範囲が墓域であったと考えてよい。立地は低台地の北縁であることから、集落域は、墓地を望むことができる現下荒木集落の地下に広がっているかもしれない。副葬品は少ないが、土器や銅銭から、15世紀前半頃の墓地と考える。

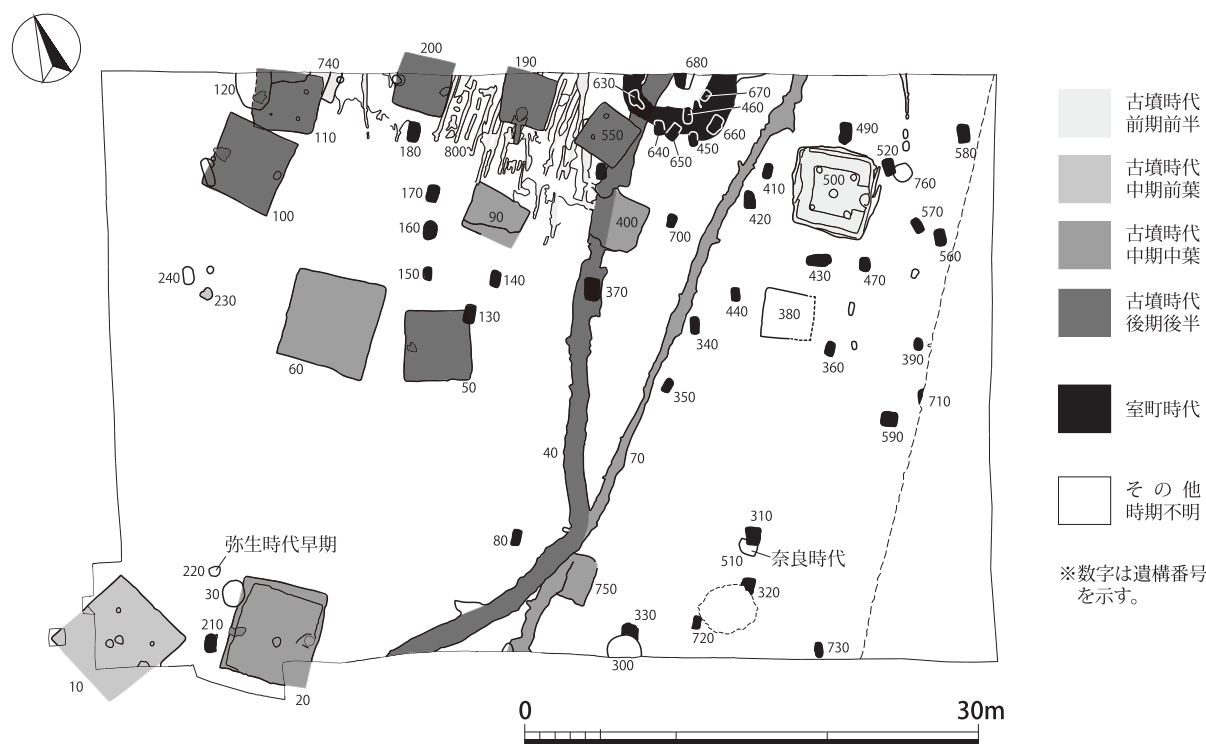


図28 主要遺構の変遷（1/500）

写真図版



(1) 調査地全景（北上空から）



(2) 調査区西半部全景（東から）

図版 2



(1) 調査区から北西方向を望む（西から）



(2) 調査区東半部全景（北から）

(1) S I 10 炭化物検出状況（北東から）



(2) S I 10 遺物出土状況（南東から）



(3) S I 10 完掘状況（北東から）



図版 4



(1) S I 20 新段階全景（北東から）

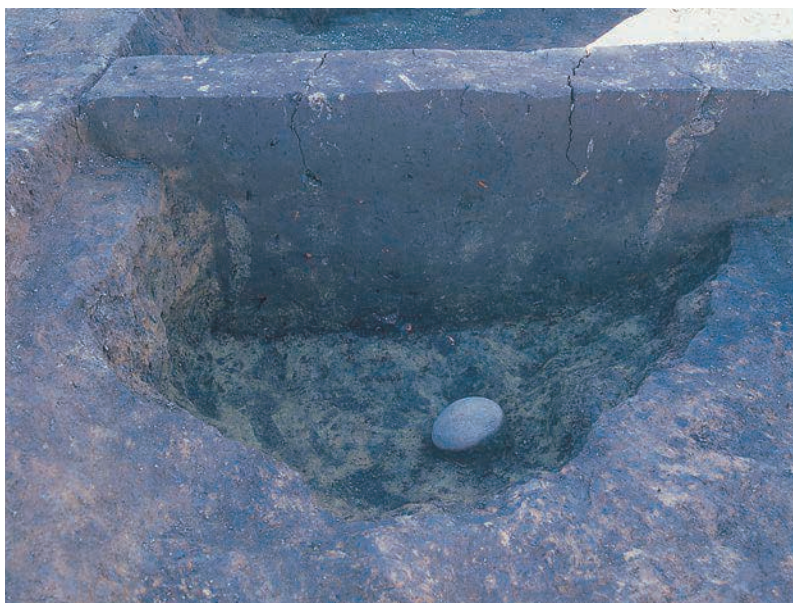


(2) S I 20 壁溝検出状況（南東から）



(3) S I 20 カマド残欠検出状況（南東から）

(1) S I 20 屋内土坑土層（北東から）



(2) S I 20 古段階完掘状況（南東から）



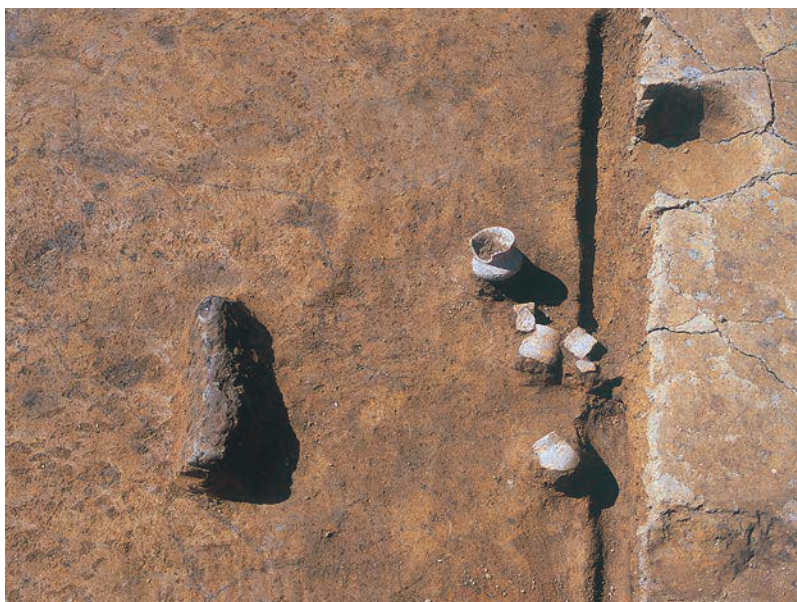
(3) S I 50 全景（北東から）



図版 6



(1) S I 60 全景（南東から）



(2) S I 60 東壁際遺物出土状況（南東から）



(3) S I 60 北西隅部壁溝・ピット配置状況（南東から）



(1) S I 90 全景 (南東から)



(2) S I 100 全景 (南東から)



(3) S I 110 全景 (南東から)

図版 8



(1) S I 190 全景（南東から）



(2) S I 190 カマド検出状況（北東から）



(3) S I 190 カマド土層（北東から）

(1) S I 200 全景（西から）



(2) S I 400 遺物出土状況（北東から）



(3) S I 500 全景（北西から）



図版 10



(1) S I 550 全景（南東から）



(2) S K 30 遺物出土状況（北西から）



(3) S K 30 土層（南西から）

(1) S K230 全景 (西から)



(2) S K240 全景 (西から)



(3) S K510 全景 (北東から)



図版 12



(1) S E 300 土層 (北東から)



(2) S D 40・70 土層 (南西から)



(3) S D 70 北端部完掘状況 (南東から)

(1) S T 220 全景 (北から)



(2) S T 80 全景 (南東から)



(3) S T 130 全景 (北西から)



図版 14



(1) S T 140 全景 (北西から)



(2) S T 150 全景 (北西から)



(3) S T 160 土層 (南西から)

(1) S T 160 桶痕跡検出状況（南東から）



(2) S T 170 土層（南西から）



(3) S T 180 土層（南東から）



図版 16



(1) S T 210 全景 (西から)



(2) S T 340 土層 (南西から)



(3) S T 370 土層 (南西から)

(1) S T 370 全景 (南東から)



(2) S T 410 全景 (南東から)



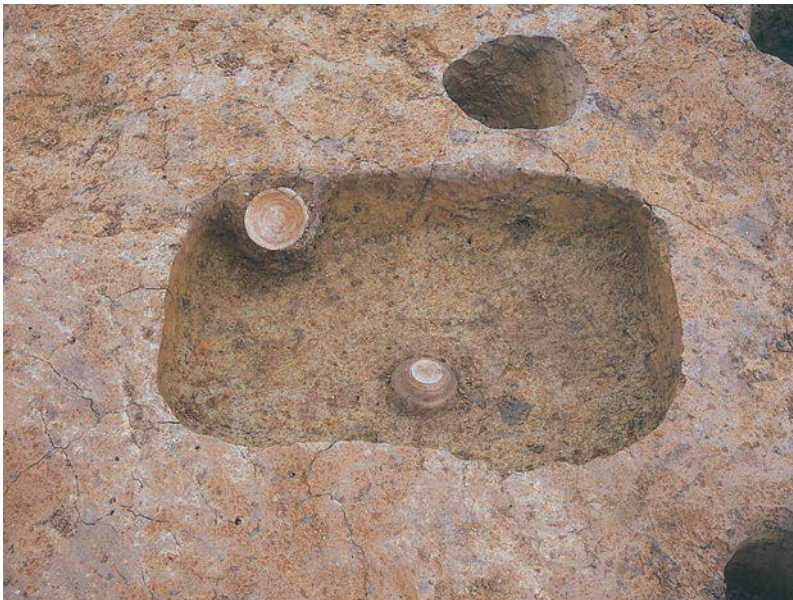
(3) S T 420 全景 (南東から)



図版 18



(1) S T430 全景 (南東から)



(2) S T440 全景 (南東から)



(3) S T470 全景 (南東から)

(1) S T 490 全景 (北西から)



(2) S T 520 全景 (東から)



(3) S T 560 全景 (東から)



図版 20



(1) S T 570 全景 (北東から)



(2) S T 580 全景 (東から)



(3) S T 590 全景 (南西から)

(1) S T 630 全景（南東から）



(2) S T 630 五輪塔出土状況（東から）



(3) ST680 全景（北東から）



図版 22

SI10-p1



SI10



SI10-床面1



SI10



SI10-床面3



SI10



SI10-床面4



SI20-屋内土坑



S120



10 (000055)

S150



15 (000043)

S120



11 (000051) ・ 12 (000057)

S160-床面3



16 (000069)

S120



13 (000041)

S160-床面1



17 (000066)

S120



14 (000054)

S160-床面2



18 (000067)

図版 24

SI60



19 (000064)

SI100-屋内土坑



23 (000074)

SI60-上層



20 (000062)

SI100



24 (000076)

SI90



21 (000072)

SI190



25 (000077)

SI90



22 (000073)

SD40



26 (000059)

SI400



27 (000086)

SI400



31 (000080)

SI400



28 (000082)

SI500-屋内土坑



32 (000107)

SI400



29 (000083)

SI500



33 (000092)

SI400



30 (000081)

SI500-下層



34 (000106)

図版 26

SI500-下層



35 (000093)

SI500-下層



39 (000104)

SI500-下層



36 (000094)

SI500-下層



40 (000101)

SI500-下層



37 (000100)

SI500-上層・最下層



41 (000048) ・ 42 (000049)

SI500-下層



38 (000095)

SI220-上



43 (000004)

ST220-下



44 (000005)

ST80-3



47 (000003)

ST220-下



44 (000005) - 内面調整

ST440-1



48 (000012)

ST80-1



45 (000001)

ST440-2



49 (000013)

ST80-2



46 (000002)

ST440-3



50 (000014)

図版 28

ST450



51 (000015)

ST410



56 表 (000011)

ST520



52 (000016)

ST410



56 裏 (000011)

ST560



53 (000017)

ST630



57 (000020)

ST590-1・2



54 (000018) ・ 55 (000019)

ST630



57 (000020) - 風輪上面加工

報 告 書 抄 録

ふりがな	はたんばるいせき だい3じちょうさ								
書 名	旗 原 遺 跡 — 第 3 次 調 査 —								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 3 1 4 集								
編著者名	小澤太郎								
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課								
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp								
発行年月日	平成24年（2012）3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘の原因
			市町村	遺跡番号					
はたんばるいせき 旗 原 遺 跡 第 3 次調査	くるめしあらきまち 久留米市荒木町 しもあらき 下荒木1540-2 ほか		40203	—	33° 15′ 56″	130° 29′ 8″	20110208 ～20110708	2,322㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構			主な遺物		特 記 事 項	
旗原遺跡 第 3 次調査	集落・ 墓地	弥生	壺棺墓	1 基	弥生土器・石器、土師 器・須恵器・銭貨・ガ ラス製品・石製品	弥生早期の壺棺墓や中世 墓群は本遺跡初確認。古 墳時代集落は4世紀前葉、 5世紀前葉～中葉、6世紀 後半の3時期。			
古墳		竪穴住居	16軒						
奈良		溝	2 条						
室町		土坑	7 基						
		土壇墓（木棺墓）	40 基						
			円形周溝墓	1 基					
要 約									
これまでの調査で、古墳時代後期～奈良時代（6世紀後半～8世紀後半）にかけての集落遺構が検出されていた。今回の調査では、それらの時期の遺構・遺物に加え、弥生時代早期の壺棺墓、古墳時代前期前半（4世紀前葉）、同中期前葉～中葉（5世紀前葉～中葉）、室町時代後期（15世紀前半）の墓地群を発見し、長期間にわたり集落や墓地が営まれた複合遺跡であることが判明した。									
土木工事の届出日		平成 2 2 年 3 月 9 日			遺物の発見通知日		平成 2 3 年 7 月 1 4 日 （23文財第386号）		

※北緯・東経は「世界測地系」に基づく数値。

旗原遺跡 -第3次調査-

久留米市文化財調査報告書 第314集

平成24(2012)年3月31日 発行

発行：久留米市教育委員会

編集：久留米市役所市民文化部文化財保護課

印刷：中村印刷有限会社
